

共同利用·共同研究拠点

京都大学東南アジア研究所 CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES KYOTO UNIVERSITY



Preface-----

東南アジア研究の国際共同研究拠 International program of Collaborative Research 東南アジア研究の国際共同研究拠点

| | | 同研究拠点「東南アジア研究の国際共同拠点」の概要 | 5 | | | |
|-------|-------|--|---------------|--|--|--|
| プロジ | エクト | の紹介 Reseach Projects | | | | |
| H24 | I-1 | メコン流域圏における農林産物リソース・チェーンと土地利用変化の解明 | 6 | | | |
| | I-2 | 居住区分類に基づいたジャカルタ大都市圏における建造環境の構造分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 7 | | | |
| H25 | I-3 | タイを中心とした国際労働移動に関する研究——地域経済統合は何をもたらすのか?—— | 8 | | | |
| | I-4 | 1930年代から50年代におけるバタヴィア・ジャカルタの華人商業ネットワークに関する研究 | 9 | | | |
| H24 | II-1 | 哲文化回廊研究───ミャンマーからタイ・カンボジアを中心に──────────────────────────────────── | | | | |
| H25 | II-2 | 弱者教済における地域観光の有効性に関するロタイ比較研究 | - 11 | | | |
| H24 | III-1 | 植民地後期インドネシアの社会と経済に関する歴史資料の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 12 | | | |
| H25 | III-2 | インドシナ戦争期北ベトナム逐次刊行資料保存・利用環境の整備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 13 | | | |
| | III-3 | が 新たな植民地資料利用の展望――シンガボール、マレーシア国家の史的起源をめぐって―――――――――――――――――――――――――――――――――――― | 14 | | | |
| H24 | IV-1 | マ化遺産情報のシステム化とオントロジー構造による Local Knowledge の理解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 15 | | | |
| | IV-2 | ミャンマー経済発展のためのロードマップと政策に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 16 | | | |
| | IV-3 | 日本の焼畑に受け継がれてきた在来知の現代的意義 東南アジアとの比較視座からの検討 | 17 | | | |
| | IV-4 | ムラビ山における大規模噴火後の景観復興過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 18 | | | |
| | IV-5 | アジアの棚田稲作における持続的農法と棚田保全に関する研究 | 19 | | | |
| | IV-6 | 東南アジア交易史における「長期の 19 世紀」 | 20 | | | |
| | | 都市・観光地における感染症の流行の情報発信方法に関する研究 インドネシアの都市と観光地における予防強化をめざして Study on a Transmission Method of Information to Disclose Outbreaks of and to Mitigate Infectious Diseases in Urban and Tourist Areas in Indonesia | | | | |
| | IV-8 | 東南アジアにおける戦争の記憶と戦後和解をめぐる関係の再構築 | 22 | | | |
| | IV-9 | 教育・研究交流を通じた東アジアにおける産官学ネットワークの社会的影響の評価 東方政策の30年を振り返って Looking Back on 30 Years of the Look East Policy: Evaluation of the Social Impact of Industry, Government and Academia Networks in East Asia through the Exchange of Education and Research | | | | |
| | | 乳利用の有無からの牧畜論再考 旧・新大陸の対比 Reconsidering the Pastoralism Concept from the Perspective of Milk Utilization—Its Comparison in the Old and New Continents— | | | | |
| C | OLUMN | 東南アジアと日本を架橋する――IPCRフェローシップ制度 Creating New Bridges between Southeast Asia and Japan―IPCR Fellowship Program | 25 | | | |
| H25 1 | IV-11 | 生存基盤指数の再検討 持続型生存基盤パラダイムの国際的発信に向けて Towards the Further Development of the Humanosphere Potentiality Index (HPI) | 26 | | | |
| | | 民主化における司法の役割——タイとインドネシアの比較—— | | | | |
| | IV-13 | 東南アジア地域資料の長期的収集・利用に関する研究 Collaborative Research for the Long-term Acquisition and Practical Use of Resources on Southeast Asia | 28 | | | |
| | IV-14 | 内陸部東南アジアの「被戦争社会」の変容とレジリエンス | 29 | | | |
| | IV-15 | 21世紀のタイ文化史 共同研究に向けた基盤形成 Thai Cultural History in the 21st Century: A Preliminary Study | 30 | | | |
| | IV-16 | 文理融合のメタ研究にむけて— 持続型生存基盤研究における経験から— Toward a Meta Study of Inter-disciplinarity in Natural and Social Sciences: Experiences from the Sustainable Humanosphere Project | 31 | | | |
| | IV-17 | 東南アジアにおける社会・生態レジリエンスに関する地域間比較研究・・・・・・Comparative Studies on Social-Ecological Resilience in Southeast Asia | 32 | | | |
| | IV-18 | インドネシア・パプア州における神経難病の時代的な環境変化に伴う変遷 | 33 | | | |
| H25 | V-1 | 仏領期メコンデルタにおける大土地所有制の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 34 | | | |
| 出版. | 受賞 | | 35 | | | |

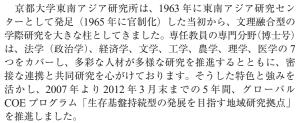
「東南アジア研究の国際共同研究拠点 |

(共同利用・共同研究拠点)

International Program of Collaborative Research, CSEAS [IPCR-CSEAS]

東南アジア研究所所長 清水 展

Director Shimizu Hiromu



その成果は、『地球圏・生命圏・人間圏―持続的な生存基盤を求めて』(2010) および全6巻の『講座・生存基盤論』(2012) として京都大学学術出版会から刊行されました。また、プログラムの期間中に計68件の国際集会・国際シンポジウムを主催または共催しました。さらにプログラムをともに推進した助教や研究員らの若手研究者の大半の12名が、テヌア付きの職を得て巣立ったことは私どもの大きな喜びであり、共同研究のひとつの成果でもあります。2011年からは、グローバル COE プログラムを継承して、特別経費「ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開」を開始しました。

また 2009 年には全国共同利用・共同研究拠点としての認定を文部科学省より受け、2010 年 4 月から「東南アジア研究の国際共同研究拠点」として新たな活動を開始しました。この拠点制度は、我が国全体の学術研究の更なる発展のために、文部科学省が国公私立大学を問わず各大学の研究ポテンシャルを活用し、研究者が共同で研究を推進する体制を整備する事業の一環として新たに設けた制度です。認定を受けて以来、東南アジア各国のほか、アメリカ、オランダ、中国、韓国、台湾などの 38 の研究機関と新たにMOU を締結し(2013 年 9 月末現在で総数は 53 に達します)、国際的な協力・連携のための態勢作りを進めてきました。

その成果のひとつひとつは、アジアにおける東南アジア研究の主要な8つの機関とともに、「東南アジア研究・アジアコンソーシアム」を設立したことです(インドネシア科学院 [LIPI]、国立フィリピン大学、タイ・チュラロンコーン大学(タイ)、シンガポール南洋工科大学、シンガポール・アジア研究所、ブルネイ・ダルサラーム大学、台湾・中央研究院、韓国・東南アジア学会)。2013年10月11日には各機関の代表が東南アジア研究所に集まり、コンソーシアム憲章への調印式を行いました。今後、加盟機関のあいだで研究者および研究プロジェクトの情報を共有し連絡・連携を密にするとともに、重要課題を共有する二者、三者、それ以上の機関のあいだで共同研究プロジェクトやシンポジウム、ワークショップの共催などを積極的に進めてゆくことを確認しました。

以下に具体的に説明しますように東南アジアの国際共同研究拠 点としての活動の推進に関して、平成25年度の中間評価では「特 筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献が多大 であると判断される」として、最高のS評価をいただくことがで きました。東南アジア研究コミュニティの諸機関ならびに関係者 各位のご協力に深く感謝いたします。私どもの研究所が推進する 学際的な研究内容を示すために、主催あるいは共催した国際シン ポジウムやセミナーの課題の一端を紹介すると、以下のようにな ります。 "Asian Core International Seminar on Socio Political and Economic Reform in Southeast Asia: Assessments and the Way Forward" (2013/3/9-12、インドネシア・科学院、参加人数 247 人)、 "International Workshop on Plural Coexistence and Sustainability: Asian Experiences in Interdisciplinary Perspectives" (2013/3/11-12), シンガポール・南洋工科大学、参加人数 50 人)、"Catching up Southeast Asian New Body: States, Markets and Public Spheres" (2013/9/26-28、タイ・チュラロンコーン大学、参加人数 100 人)。

また国際共同研究を推進するために東南アジア研究所に来訪さ



The Center for Southeast Asian Studies (CSEAS) was founded in 1963 and since then it has been a pillar of multidisciplinary research. Our staff come from highly diversified fields such as politics, economics, humanities and social sciences, engineering, agriculture, sciences and medical sciences, and they promote multidisciplinary research as well as pooling their efforts into collaborative ventures. In this spirit, from 2007 to 2012 the Center was host to a G-COE initiative, "in Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa." The outcome of this project was seven edited volumes published by Kyoto University Press and during this project nearly 70 international conferences and symposium were held. It gave me great pleasure to know that almost all the young researchers (12) who were on the project were able to obtain some form of tenure as a result of their participation in the program and this, in itself, is one result of their collaborative efforts. Since 2011, we have initiated another new Large-Scale Research Program entitled "Promoting the Study of Sustainable Humanosphere in Southeast Asia."

Thanks to a great deal of support from many research institutions and academic communities, the Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University was designated as one of the Joint Usage/Research Centers in Inter-Universities of Japan by the Japanese Ministry of Education, Science and Technology (MEXT) in April, 2010. This system is promoted under the aegis of MEXT's policy for nurturing the research potential of universities and promoting broad-based collaboration regardless of the national, public, and private affiliation of universities, in order to further the development of scholarly investigation in Japan. Since the recognition as a Joint Usage/Research Center, we have signed memorandums of understanding (MOU) with 38 institutions in countries not only in Southeast Asia, but also in other areas of the world such as America, Holland, China, Korea, and Taiwan with the aim of furthering international linkages.

In 2015, the Center will officially celebrate its 50th anniversary, during which it hopes to launch the international Consortium for Southeast Asian Studies in Asia (SEASIA) in collaboration with eight core partner institutions in Southeast Asia and East Asia to promote international research exchange and collaboration. For that sake the signing ceremony of the SEASIA Charter was held at CSEAS on 11 October, 2013 attended by representatives from member institutions (LIPI of Indonesia, Chulalong-korn University of Thailand, University of the Philippines, Universiti Brunei Darussalam, NTU and ARI of Singapore, Academia Sinica of Taiwan, KASEAS of Korea). All members agreed to vigorously promote academic cooperation among member institutions through joint research projects, seminars and workshops, and information sharing.

This year we also received good news on the IPCR program. CSEAS received the highest grade "S" on an interim evaluation (Sept. 2013) on the activities and achievements for Joint Usage/Research Center in Inter-Universities of Japan. We would like to express our sincere gratitude to those institutions and individual members in the academic community of Southeast Asian Studies for their help in making this program succeed. Through collaborative research we had 5,271 foreign scholars participate in

れた招聘外国人学者、外国人共同研究者、外国人研究員、あるいは国際セミナー等に参加した外国人学者の総数は、過去3年で5,271人(2010年)、4,727人(2011年)、4,743人(2012年)に達します(2011年に総数が減ったのは、グローバル COE プログラムの終了による影響です)。さらには、名実ともに東南アジア研究の国際共同研究拠点としての活動を推進するために、2012年には英文ジャーナル Southeast Asia Studies を創刊(年に3号発刊)しました。多言語電子ジャーナル Kyoto Review of Southeast Asia の紙面を一新拡充しました。両ジャーナルとも、海外からの投稿とともに、日本からの研究成果の英語発信の場として機能することを目指しています。

国際共同研究の具体的な活動としては、4つの異なるタイプの研究への公募助成を行っています。タイプ I はジャカルタとバンコクの海外連絡事務所を活用したフィールド滞在型研究、タイプ I は外国人客員制度を活用した拠点集中型研究、タイプ I は外国人客員制度を活用した資料共有型研究、タイプ I は近い将来のプロジェクト形成を目指す萌芽型研究です。それらの研究は、毎年度末の年次報告集会で成果発表・共有をしていただいております。それ以外にタイプ I として、「地域研究叢書」の国際公募出版の助成をしています。2010年4月に共同利用共同研究機関に認可されてから今日までの4年間に採択された課題は、タイプ I が

私どもの助成の特徴として強調したいのは、研究所のアセットや研究サポート制度を提供し、国際共同研究の推進に最大限の協力をしていることです。とりわけタイプIからタイプⅢの研究助成は、私どもの研究所だからこそ実施可能であり、また私どもでなければできないことと自負しています。

タイプ I は、研究所が維持しているバンコクとジャカルタの連絡事務所の駐在員として 3ヶ月の滞在をしていただき、事務所の設備を最大限に活用して国際的な共同研究を推進していただく、あるいはその組織化と始動のための準備をしていただくものです。タイプ II は、客員教授として 6ヶ月招請する制度を活用し集中的な共同研究を推進していただくものです。タイプ II は、私どもの研究所だけが所蔵する資料を活用して研究を推進していただくものです。いずれも、国際共同利用・共同研究拠点として、当然に果たすべき責務ではありますが、それを愚直に誠実に遂行することによって、東南アジア研究者コミュニティの活動展開に大きな貢献を果たしうると確信しています。

このような私どもの活動は、東南アジア研究の研究者コミュニティのご理解とご支援があって初めて可能となり、また大きな成果を得ることができます。皆さまの一層のご協力を心からお願いします。

international seminars in 2010 (4,727 in 2011 and 4743 in 2012: the drop was due to the end of our G-COE program). To further the activities of collaborative research we inaugurated a new international journal in English, *Southeast Asia Studies*, which is published three times a year. We also revived our multilingual online journal *Kyoto Review of Southeast Asia* in a fully revised and upgraded form. These moves are in order to increase submissions from overseas scholars and further promote scholarship from Japan.

In order to carry out our mission we offer grants for four different types of collaborative research. Type I is Field-based Area Studies by Using Field Stations and Liaison Offices. Type II is Intensive and Strategic Area Studies in Collaboration with CSEAS Visiting Fellows. Type III is Document—Sharing through Use of CSEAS Repository. Type IV is Exploratory Area Studies Aiming at Larger-scale Research Projects. Besides these types, we have type V for Publication grant of "Kyoto Area Studies on Asia."

Since 2010, we have supported 8 researches in the Type I category, 4 in Type II, 5 in Type III, and 33 in type IV. In addition to these research projects, we are financially supporting the publication of 5 books. What I would like to emphasize is that we have greatly contributed to the promotion of international collaborative research by providing a support system, facilities and assets we have at our disposal. I firmly believe that only CSEAS can offer this kind of support service to the academic communities of Southeast Asian Studies and that we have the responsibility to do so.

With Type I, we also send researchers to stay at our Bangkok and Jakarta liaison offices for up to three months, while they maintain and use their facilities to promote international collaborative research. With type II, we also promote the stay of scholars at CSEAS for up to six months to conduct intensive collaborative research. Type III promotes the use and research of our extensive collections. As a Center of research excellence, we believe that we are now greatly contributing to the Southeast Asian research community.

These activities have only become possible through the understanding and support of the research community and will allow us to create innovative research results. We look forward to maintaining our role in this venture.



「東南アジア研究・アジアコンソーシアム」 設立のための憲章の署名式に参加した各機関の代表者(2013 年 10 月 11 日 東南アジア研究所東南亭) The souvenir photo after the signing ceremony of SEASIA Charter at CSEAS on 11 Oct, 2013

共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同拠点」の概要

京都大学東南アジア研究所は、2009年10月文部科学省から共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」として認定され、2010年4月から東南アジア研究に関する国際的な公募研究や共同利用の事業を開始しました。この拠点制度は、我が国全体の学術研究の更なる発展のために、文部科学省が国公私立大学を問わず大学の研究ポテンシャルを活用し、研究者が共同で研究を推進する体制を整備する事業の一環として、2010年度から新たに設けられました。本研究所への認定は、約半世紀にわたる東南アジア研究の実績に基づくもので、更なる研究の発展のための国際的な共同研究拠点として、その役割を果たすことが求められています。

本研究所は「東南アジア研究の国際共同研究拠点」として、2010年4月から文理融合と現地社会との協働を核とする東南アジア研究の推進、東南アジア関連史資料のアジア・ハブ強化を目指す「国際共同研究」、世界トップレベルの学術雑誌・叢書の出版をねらいとする「国際公募出版」などの共同研究の事業、及び共同利用・共同研究室の設置、図書室、GIS(地理情報システム)ラボ、地図共通資料室などの共同利用の事業を本格的に開始しています。

本事業に関する詳細や公募については、ホームページ http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/で案内しています。

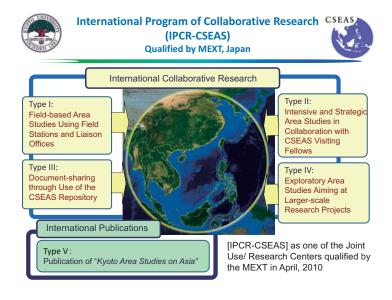
IPCR-CSEAS Outline

The Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University newly launched "International Program of Collaborative Research, CSEAS [IPCR-CSEAS]" as one of the Joint Use/Research Centers qualified by MEXT in April, 2010.

This system is promoted under the aegis of MEXT's policy for nurturing the research potential of universities and promoting broad-based collaborations regardless of national, public, and private universities affiliations, in order to further the development of scholarly investigation in Japan. Recognition as IPCR-CSEAS is due to important contributions made to Area Studies during the last 50 years with future expectations as an outstanding and leading organization in Southeast Asian Studies.

With this responsibility IPCR-CSEAS, started international collaborative research aiming at 1) promoting Southeast Asian Studies with an emphasis on the integration of the humanities, social and natural sciences and collaboration with local people and society, 2) strengthening its function as a hub in Asia of historical documents and research materials on Southeast Asian Studies, and 3) publishing world class academic journals and monograph series. It also provides joint-use opportunities to share facilities and equipment such as its library, GIS facilities, and map room related to Area Studies in CSEAS.

The details can be obtained from the URL: http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/



2012年度「東南アジア研究の国際共同研究拠点」参加機関および参加者数 IPCR Participation Results for FY2012

| | 2012 | | | | |
|--|--------------------------------------|------------------------|------------|------------------------------|--|
| Category | Number of Affiliated Institutions | Number of Participants | | | |
| 2 | | Total | Foreigners | Master/ Doctoral Students | |
| Within Kyoto University | 12 | 287 | 12 | 16 | |
| National University | 21 | 165 | 1 | 16 | |
| Public University | 8 | 89 | 5 | 8 | |
| Private University | 32 | 89 | 0 | 5 | |
| Collaborative Research University Institutions | 2 | 29 | 0 | 0 | |
| Public/Independent Institutions | 10 | 37 | 0 | 0 | |
| Private Sector Institutions | 6 | 38 | 0 | 0 | |
| Overseas Institutions | 13 | 254 | 254 | 123 | |
| Others | 4 | 6 | 0 | 0 | |
| Total | 108 | 994 | 272 | 168 | |



メコン流域圏における農林産物リソース・チェーンと土地利用変化の解明

フィールド滞在型

Study on Resource Chains of Agro-forest Products and Land-use Change in Mekong Region

横山 智(名古屋大学・大学院環境学研究科),**河野泰之**(京都大学・東南アジア研究所),富田晋介(フリーランス研究者),Maniemai Thongyou(コンケーン大学・ メコン流域多元性研究所)

Yokoyama Satoshi (Nagoya University, Graduate School of Environmental Studies), Kono Yasuyuki (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Tomita Shinsuke (Freelance Researcher), Maniemai Thongyou (Khon Kaen University, Center for Research on Plurality in the Mekong Region)

研究概要 Outline of Research

タイ、ラオス、カンボジアなどのメコン流域の国々において、近年のグローバル化の影響で急激に面積を拡大させている農産物や植林事業による土地利用変化に着目し、その変化要因となっている農林産物の背後にある様々な関係性を明らかにすることを目的にする。そのために、物質循環、LCA、フードシステムなどの従来概念との理論的な接合を検討し、総合的な視点としてのリソース・チェーンの提案を行う。

The purpose of the study is to clarify the various relationships that lie behind landuse changes which are rapidly expanding the areas of agro-forest products and plantation trees, a phenomenon caused by recent globalization in the Mekong region, particularly in Thailand, Laos and Cambodia. In order to realize this goal, we will examine existing studies such as those that deal with goods flows, LCA, and food chains to adapt a theoretical frame work to our resource chain study.

研究目的

メコン流域の国々では、地域外部の需要で導入されている様々な農林産物が、急激な土地利用変化を引き起こしている。しかし、それら農林産物が人びとの生活、地域社会、そして自然生態系など、総合的な視点からどのような影響を与えているのかは決して明らかになっていない。本研究では、タイ、ラオス、カンボジアのメコン流域の3カ国で近年のグローバル化の影響で急激に面積を拡大させている農林産物導入による土地利用変化に着目し、その背後にある様々な関係性(本研究では、リソース・チェーンと称する)を明らかにすることを目的にする。

研究の意義

メコン流域の国家・コミュニティ・個人が新しい何かと対峙した時、いかなる基準でどのような対応をしてきたのであろうか? 地域独自の生存戦略が存在しているはずであり、常に先進国の支配や侵略、中国へゲモニーに屈しているわけではない。本研究では、農産物や植林事業の導入を事例にして、新しい農林産物の導入に対する人々の対応プロセスから土地利用と資源利用の変化を促している原動力と要因の解明に挑み、持続的な土地利用を導く点に研究の独自性と意義を見いだすことができる。

期待される効果

本研究によって、以下の2点の成果が期待される。

- (1) リソース・チェーンを解明することによって、今後、何が 新しく生み出され、何が失われるか、生態系と社会環境の 両方の変化を予測することが可能となる。
- (2) 外部から導入された作物や植林木による土地利用変化と地域社会変化の解明によって、土地資源・農作物流通・農作物消費に関するガバナンス・国家規制への提言が可能となり、自らの土地資源を自ら管理し、自ら持続的に利用する筋道を導くことに貢献することが期待される。



ラオス北部の中国輸出向けのスイカ契約栽培 Contract farming of watermelon with Chinese firms in northern Laos

Purpose of Study

In the Mekong region, rapid land-use changes have occurred through the introduction of various agro-forest products that cope with the demands from external markets. However, we do not know how land-use changes impact on locals' livelihood, regional society, and the natural ecosystem in the Mekong region. Therefore, this study will focus its attention on changes in land-use and resource chains of agro-forest products that occur through globalization in three countries, principally, Thailand, Laos and Cambodia. It will clarify the various relationships that lie behind land-use changes.

Significance of the Study

When countries, communities and individuals in the Mekong region were confronted with something new, how did they handle it and through what criteria? Throughout the Mekong region's history, countries have developed subsistence strategies peculiar to social and natural environments in Mekong regions. In particular, they did not always yield to Western control, U.S. and Japanese invasions and Chinese hegemony. In this study, we aim to understand the proximate and remote causes, as well as the driving forces of changes in land-use and resource chains by newly introduced agro-forest products in the Mekong region. The originality and significance of this study is to conduct a way of sustainable land use from the viewpoint of locals.

Expected Results

The following two outcomes are expected:

- The prediction of both socio-economic and ecological changes in the study area by clarifying resource chains and the various relationships that lie behind land-use changes brought about by globalization.
- 2. The creation of socio-economic, ecological and political guidelines for the management of resources (i.e. control of production, distribution and consumption) by clarifying the changes in land-use and regional society after introducing new agro-forest products into the Mekong region. This study will provide a path towards an appropriate resource use and management so that locals can properly manage and sustainably use the resources for their own purposes.



タイ東北部ウドーンターニー郊外におけるパラゴム植林地 Para-rubber plantation site at Udon Thani suburb in Northeastern Thailand



居住区分類に基づいたジャカルタ大都市圏における建造環境の構造分析

フィールド滞在型

Structural Analysis of Built Environment in Jabodetabek Based on Classification of Residential Type

林 憲吾 (総合地球環境学研究所・研究部),**村松 伸** (総合地球環境学研究所・研究部),三**村** 豊 (総合地球環境学研究所・研究部),**水野広祐** (京都大学・東南アジア 研究所)

Hayashi Kengo (Research Institute for Humanity and Nature, Research Department), Muramatsu Shin (Research Institute for Humanity and Nature, Research Department), Mizuno Kosuke (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

ジャカルタ大都市圏の建造環境の空間構造を明らかにする。ジャカルタ市ならびに周辺の各行政区で土地利用データなどの収集を行い、商業、工業、居住など、機能別に建造環境の空間分布を描く。さらに、大都市圏全体の居住エリアを、物理的指標に基づいて複数のタイプの居住区へと類型化し、各居住区別に都市化のプロセスの違いと空間分布を明らかにする。それをもとに、今後の都市化の傾向を考察する。

共同研究者との短期での現地調査数回と、研究代表者による平成 25 年度 7、8、9 月の 3 カ月間のジャカルタ連絡事務所長期滞在によって、フィールド調査、データ収集を進める。

In this study, we aim to clarify the spatial structure of the built environment in Jabodetabek, Indonesia. Firstly, we will collect land use data at the greater metropolitan area level and define spatial distribution by function, such as residential zone, commercial zone, etc. Secondly, for residential areas, we will classify them into several types, based on physical characteristics, and generate a spatial distribution for each of them. We will also examine the processes of urbanization for each consecutive residential type. By doing this, we will consider the course of future urbanization.

本研究は、東南アジアで最も人口集積が大きいメガシティであるジャカルタ大都市圏(ジャボデタベック)を対象として、その都市景観の大部分を占める住宅や商業施設、インフラといった建造環境の空間的構造を明らかにすることを目的とする。とりわけ、独立以後から現在にわたって急増してきた人口が、どのように都市に定着したかを、彼らの居住環境の変遷に焦点を当てて分析する。

具体的には、(1)ジャカルタ大都市圏レベルで土地利用データの収集および作成をおこない、建造環境の空間分布を住宅、商業施設、工場など機能別に描き出す。(2)居住エリアについては、住宅や街区組織の形状など物理的な特性の違いによって複数のタイプの居住区に分類し、それぞれの空間分布を作成する。(3)各居住区ごとに都市化の速度やライフスタイルを調査し、独立後に多様な居住環境が形成されていく過程を理解する。

東南アジアには人口1,000万を超えるメガシティは複数あり、 今後数十年は、さらなる人口増加が見込まれている。どの都市で も人工物の集積が著しく、中間層や富裕層をターゲットにした新 興の住宅地開発は、従来の居住環境を大きく変えつつある。しかし、 持続可能な都市の観点からは、都市が既に蓄積している環境や文 化を生かした設計が不可欠である。したがって、既存の土地利用 分類に加えて、複雑に変化する大都市の居住区を従前より高い解 像度で分析することで、今後の都市化の行方を推察することだけ でなく、持続可能な都市づくりに向けて、ローカルな建造環境や 居住文化が持つ利点を提示することに貢献する。

ジャカルタの景観。 低層の住宅地から高層のアパートメントまで、異なる種類の居住区で大都市が構成されている。

Jakarta's landscape. The megacity consists of several different types of residential areas such as a low-rise residential areas, high-rise apartments, etc.

In this study, using the subject of the Jakarta greater metropolitan area (Jabodetabek), a mega-city with the greatest population concentration in Southeast Asia, we aim to clarify the spatial structure of the built environment such as infrastructure, residences and commercial facilities. In particular, we will analyze how the population, which has rapidly increased since independence until now, became established in the city through focusing on the environmental changes to their residences.

Specifically, 1) We will carry out collection and generation of land use data at the Jakarta greater metropolitan area level, and define the spatial distribution of the building environments separately by function, such as residence, commercial facility, factory, etc. 2) For residential areas, we will classify them into several types of residential areas, based on physical characteristics, and generate spatial distributions for each. 3) We will examine the processes and lifestyles of urbanization for each residential type one by one, and attempt to understand the process by which residential areas were formed following independence.

There are several megacities in Southeast Asia with populations exceeding 10,000,000, and they are expected to further increase in the next few decades. No matter which city, the accumulation of man-made objects is striking, and the development of emergent residential districts that target the middle and upper class are in the process of changing traditional residential environments on a grand scale. However, from the point of view of sustainable cities, a design for the city that makes the best use of the environment and already established culture is essential. Accordingly, in addition to the classification of existing land use, by analyzing the residential areas of an intricately changing city at a greater resolution than previously, not only can we guess the course of future urbanization, but also contribute to showing those advantages that are found in locally built environments and culture, aiming towards the creation of a sustainable city.



都心のカンボン(都市内集落)。狭い路地に住宅が密集し、多くの人口を吸収する。 Urban Kampung which is a densely populated area. It is full of small houses along narrow alleys.



タイを中心とした国際労働移動に関する研究――地域経済統合は何をもたらすのか?-

フィールド滞在型

Study on International Migration to Thailand from Neighboring Countries: What Impact Will Economic Integration Have?

矢倉研二郎 (阪南大学・経済学部), 小林 知 (京都大学・東南アジア研究所), Keola Souknilanh (日本貿易振興機構アジア経済研究所), 水野敦子 (九州大学・大学院経済学研究科), 初鹿野直美 (日本貿易振興機構アジア経済研究所・バンコク事務所), 竹口美久 (京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科)

Yagura Kenjiro (Hannan University, Faculty of Economics), Kobayashi Satoru (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Keola Souknilanh (Institute of Developing Economies), Mizuno Atsuko (Kyushu University, Graduate School of Economics), Hatsukano Naomi (Institute of Developing Economies, Bangkok Office), Takeguchi Miku (Kyoto University, Graduate School of Asian and African Area Studies)

研究概要 Outline of Research

本研究は、タイへの周辺諸国(カンボジア・ラオス・ミャンマー)からの労働移動と、これらの国々の農村経済や農業をはじめとする各種産業の発展との間の相互規定関係を明らかにすることを目指す。そしてそのことを通じて、近年進められてきた ASEAN の経済統合や大メコン圏開発(GMS 開発)による国境を越えたヒトやモノ、資本等の移動の自由化・円滑化が東南アジア大陸部諸国の産業や労働市場に与える効果を占う。この研究に必要なデータを収集するため、これらの国々の事業所や労働者、農村世帯等に対する実地調査を行う。

ASEAN の経済統合や GMS 開発の進展がカンボジア、ラオス、ミャンマー(以下、CLM)の各種産業に与える効果を的確に把握するには、CLM からタイへの大規模な労働移動の存在を十分に考慮する必要がある。CLM における産業の発展は、CLM からタイへの労働力移動を抑制する方向に作用するであろう。タイでの就労で知識や技能を身につけた労働者が自国に帰ることで、CLM 国内の産業の発展を促すこともありうる。一方、少子化を背景にタイでは人手不足が深刻化し、CLM からタイへの労働移動が一層活発化する可能性がある。そしてそれによって CLM 国内でも「人手不足」が生じ、各種産業の発展が阻害されるかもしれない。

本研究は、ASEAN の経済統合や GMS 開発の進展が CLM の経済にもたらす効果を占うための材料とするべく、上述のような、CLM からタイへの労働移動と CLM 国内の産業の発展との相互規定関係を明らかにすることを目的とする。

本研究の第1の意義は、域内経済統合や GMS 開発が CLM の経済に与える効果を占うための材料を提供するということにあるが、それだけでなく、本研究は、CLM からタイへの労働移動が CLM 国内の産業に与える効果を明らかにすることを通じて、CLM 各国がタイへの労働移動にどのような姿勢で臨むべきかについてもヒントを与えることができる。

The aim of this research is to reveal the interrelation between labor migration to Thailand from neighboring countries (Cambodia, Laos, and Myanmar) and industrial and rural development among Thailand's neighbors. By doing so, this research will enable us to predict how industries and labor markets in continental Southeast Asia will be affected by the facilitation and delivery of cross-border movement of people, goods and capital in this region, which have been promoted through the economic integration of ASEAN as well as development initiatives in the Greater Mekong Subregion. To collect data for this research, we will conduct field survey of business establishments, laborers and rural households in these countries.

To have a solid understanding of the possible effects of economic integration of ASEAN and GMS development initiatives in industries in Cambodia, Laos and Myanmar (hereafter referred to as CLM), we need to take into full account a large flow of labor migration from CLM to Thailand. The migration flows to Thailand would be curbed by industrial development in CLM. The return of CLM's migrant laborers to their own countries can help industrial development in these countries if those workers have enhanced their knowledge and skills while working in Thailand. On the other hand, labor migration from CLM to Thailand might be further increased because of the escalation of labor shortage due to a declining birthrate in the latter, which might also cause "labor shortages" in CLM and thus discourage industrial development in CLM.

This research aims to reveal the above-mentioned interrelation between labor migration from CLM to Thailand and industrial development in CLM with a view to predict the effects of the economic integration of ASEAN and development initiatives in the GMS on CLM's economies.

The significance of this research is that, apart from providing us with material to predict the impacts of economic integration and GMS's development initiatives, it will give us hints on how CLM should address labor migration of their people to Thailand.



海外出稼ぎ斡旋業者(カンボジア・タケオ州) The office of a recruitment agency for working abroad (Takeo, Cambodia)



NGO による外国人労働者向け職業訓練(タイ・バンコク) Vocational training for foreign workers by a NGO (Bangkok, Thailand)



フィールド滞在型

1930年代から50年代におけるバタヴィア・ジャカルタの華人商業ネットワークに関する研究

Research on the Chinese Commercial Network in 1930s to 1950s Batavia-Jakarta

泉川 普(広島女学院大学・国際教養学部),**水野広祐**(京都大学・東南アジア研究所),**北村由美**(京都大学・附属図書館),植村泰夫(広島大学),**小座野八光**(愛知県立 大学・外国語学部)

Izumikawa Hiroshi (Hiroshima Jogakuin University, Faculty of Liberal Arts), Mizuno Kosuke (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Kitamura Yumi (Kyoto University Library), Uemura Yasuo (Hiroshima University), Kozano Yakou (Aichi Prefectural University, School of Foreign Studies)

研究概要 Outline of Research

本研究は、インドネシア史上の転換期であった 1930 年代から 50 年代におけるバタヴィア・ジャカルタの華人の商業ネットワークの実態を経済学(担当:水野)、社会学(担当:北村)、そして歴史学(担当:植村および小座野)による領域横断的なアプローチから分析し、同時期の都市社会の形成とネットワークとの相関関係を明らかにする。

そのため、共同研究者との文献サーヴェイおよび研究代表者による平成 26 年度 7 月から 9 月によるジャカルタ連絡事務所を拠点とした現地調査を進める。 This research is concerned with the substance of Chinese commercial networks in Batavia-Jakarta from the 1930s to 1950s, a period that was a turning point in Indonesian modern history, and relations between the urban development of Jakarta and the ethnic network. It is being conducted in collaboration with historians (Dr. Umura and Mr. Kozano), economists (Dr. Mizuno) and sociologists (Dr. Kitamura). It is necessary to focus on the Chinese in searching for the urban history of Batavia-Jakarta because they played an important role in urban development since 17th century.

For this purpose, I intend to organize a workshop to survey the bibliographic sources with other member in Kyoto in 2013.

In 2014, I will stay at Jakarta-office of Kyoto University in order to conduct field work and search for historical material relating to Batavia-Jakarta.

Finally, our team will publish these results in several workshops and conferences in Japan as well as abroad.

本研究の目的は、インドネシア史の画期であった 1930 年代から 50 年代のバタヴィア・ジャカルタの華人商業ネットワークについて検討することである。その際、オランダ語およびインドネシア語の文献調査のみならず、フィールドワークを行うことで、その実態に迫ることを試みる。

従来の華人研究では、社会関係に基づくネットワークを用いて、 広域的なビジネスを展開したとされるが、その限界性については あまり触れられていない。そこで、本研究では、華人商人のネットワークがビジネスのどの場面で機能したのか、もしくは機能し なかったのか、他のグループ(ミナンカバウ人や日本人)との競 争に際して、個々の華人商人たちに対して、このネットワークは どのような役割を果たしたのか、ということを通じて、社会関係 に基づく華人商業ネットワークの機能および分析手法としての有 効性を再考する意義を持つ。

研究対象とする時期に東南アジア各地では、植民地国家から国民国家体制への転換が見られたが、独立後の「国民国家」は、かつて植民地国家を支えていた華人商業ネットワークを「国民」の名の下で排除することができた。換言すれば、華人商業ネットワークの代替となるネットワークが登場したと想起できる。つまり、この実態を検討することは、バタヴィア・ジャカルタ史の多様性を経済面から明らかにすることにつながり、1930年代から50年代という「危機と変化」の時代の特性を考察する一助となる。

The purpose of this research is to analyze the substance of Chinese commercial networks between 1930s to 1950s, when destructive changes including a depression, the Second World War and the Independence War occurred in Indonesia.

Previous studies on overseas Chinese have a tendency to emphasize the function of networks based on ethnic ties to their businesses. It is said that this type of network spread beyond national borders, while its limits were hardly mentioned. Thus, it is necessary to consider when and to what extent this sort of network functioned in competition with other ethnic groups including the Minangkabau or Japanese, especially in 1930s. In other words, this research is significant as it will reconsider the effectiveness of ethnic-based networks as an analysis method.

However, such "outsiders" had an important role in establishing the national economy in the colonial period, and nation states in Southeast Asia enabled their governments to abolish them including Chinese under the name of "nation" after the independence. It may be thinkable that other networks emerged and replaced the Chinese ones. To analyze this historical change offers one clue in understanding urban history from several aspects as well as the characteristics of the "crisis and rebirth" period between the 1930s to 1950s.



パッサール・バル(1935 年頃)

Pasar Baru (circa: 1935)

Source: Scott Merrillees, Greetings from Jakarta Postcards of a capital 1900-1950, Equinox Publishing (Jakarta), 2012: 186



ジャカルタ金徳院(2011 年)

撮影:泉川

Kim Tek le Temple in Jakarta (2011) Source: Izumikawa Hiroshi



拠点集中型

東西文化回廊研究――ミャンマーからタイ・カンボジアを中心に―

Study on East-West Cultural Corridor—From Myanmar to Thailand and Cambodia

柴山 守(京都大学・地域研究統合情報センター), Surat Lertlum(チュラチョムクラオ・タイ王国軍大学校・コンピュータ学科), Elizabeth Howard Moore(ロンドン大学・東洋アフリカ学研究所), 小林 知(京都大学・東南アジア研究所), 松浦史明(上智大学・アジア文化研究所)

Shibayama Mamoru (Kyoto University, Center for Integrated Area Studies), Surat Lertlum (Chulachom Khrao Royal Military Academy, Computer Program), Elizabeth Howard Moore (University of London, School of Oriental and African Studies), Kobayashi Satoru (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Matsuura Fumiaki (Sophia University, Institute of Asian Cultures)

研究概要 Outline of Research

大陸部東南アジアにおける仏教文化の伝播において地域の固有性と文化圏としての特性にみる類似性、および東西回廊の全体像を、交易や文化ネットワークに関する史実やこれまでに入手不可能であったミャンマー当局から提供される考古資料等とフィールド調査による検証を伴って明らかにする。本研究では、特にミャンマー考古局から提供される未公開資料にもとづく調査と東西回廊関連研究をリンクし、ミャンマーからタイ、カンボジアに至る仏教伝播と文化圏の態様を明らかにする。

This project proposes two related case studies to delineate similarities between local and regional Buddhist cultures to enable the identification of local and transnational commonalities in past and living heritage communities.

The first study uses a comparison of stiffeet to propose read giver trade and

The first study uses a comparison of artifacts to propose road, river, trade and cultural routes between eleven Iron Age and walled Buddhist sites in Upper Myanmar of the first millennium CE. The second study uses artifacts and local and foreign historical material from Dawei, Tanintharyi Division, Lower Myanmar, to define common historical links with Thailand and Cambodia. These include not only political and economic factors related to Dawei's strategic maritime and inland connections, but common beliefs and ritual practices within the shared Buddhist heritage of these countries.

本研究は、仏教文化の伝播において地域の固有性と広域の文化圏としての特性にみる類似性、および東西回廊の全体像を明らかにするために、ミャンマー国文化省考古局による未公開にある発掘調査報告資料(2005~2011)やタイ国文化省芸術局の全土遺跡資料にもとづいて、ミャンマーに散在する遺跡からタイ国に至る地域の鉄器、壁画、遺物等の考古資料から仏教伝播に関する道路、河川、交易など伝播ルートに注目した比較検討と検証を行う。また、タイ、カンボジアにおける東西回廊学説と関連して、Dawei、Tanintharyi、南東部のミャンマーの遺蹟資料との比較検討を行い、Dawei における海域あるいは島嶼間の政治的、経済的な関係のみならず仏教文化における儀式や仏教実践についても探究する。

本研究は、考古学、人類学、地理学やリモートセンシングなど地域情報学との学際研究として進める。そして、東西回廊に関係するマレーシアを含めたマッピングを CSEAS、SOAS (ロンドン大学)、CRMA (チュラチョムクラオ・タイ王国軍大学校)、CIAS (地域研究統合情報センター)の共同で進める。

本研究は、新たに提供されるミャンマー側からの資料で比較検討を容易にする。また、関連するケース・スタディから地理空間的な東西回廊の全容の解明に貢献する。これにより、地域固有の歴史に加えて、コミュニティ、生業、交易などの伝播ルートにおけるマッピングを行って、以前は公開されていなかった空間情報的な構造が明らかになる。また、ミャンマー国文化省との連携による今後の新たな学術交流の展開に極めて大きい意義がある。本研究は、文理融合とフィールド調査による学際的研究である。

タイ・カンボジア国境近くで発見された石像の調査(2013 年 7 月 20 日) Survey of stone statue discovered in nearby Thai-Cambodia border (20 July 2013)

The project aims to move beyond the ethno-linguistic and national paradigms embedded in the literature on Myanmar and neighboring regions. Post-colonial discourse risks replacing the local-foreign dichotomy with another model that essentializes the nuances which give local cultures their distinct identity. This project is instead geospatially grounded through the cities and places of the related case studies. Employing GIS to draw together historical records, remote sensing and cartographic resources, the local significance of artifacts are informed by road and river networks and the cultural corridor of past and living communities. This project underlines the inseparability of the environment and local prerogatives determining the syncretic character of Buddhist cultures across mainland Southeast Asia.

In this context, a geo-informatics structure is compatible with local chronicles, historical records and archaeological artifacts in mapping a cultural landscape of cities, rivers and peoples, their local beliefs as well as use, production and trading of resources. The project seeks not just quantitative data, but also an interpretation of the the past through anthropological documentation of natural resources use, the ritual beliefs and practices of living communities, an understanding of the past as well as the present routes linking physical and intangible networks.



ミャンマー・ヤンゴン大学考古学科における「東西回廊」講義(2013 年 7 月 26 日) Lecture on "East-West Corridor" in Department of Archaeology, Yangon University, Myanmar (26 July 2013)



拠点集中型

弱者救済における地域観光の有効性に関する日タイ比較研究

Comparative Study on the Validity of Local Tourism for Supporting Disadvantaged Populations

石井香世子(東洋英和女学院大学・国際社会学部), Kannapa Pongponrat (タマサート大学・イノベーション・カレッジ), 速水洋子(京都大学・東南アジア研究所) Ishii Kayoko (Toyoeiwa University, Faculty of Political Science), Kannapa Pongponrat (Thammasart University, College of Innovation), Hayami Yoko (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

本研究は、日本人研究者 2 名とタイ人研究者 1 名からなるグループで、タイと日本それぞれにおいて、津波被害後の観光活動が「弱者」(外国人労働者やマイノリティ労働者を含む)の復興と救済にどの程度役立ったのかを日本の事例を中心にタイに関する既存研究と比較する形で検証し、役立った部分についてはどのような条件下でそれが可能となるのかを考察する。

平成 25 年度には(1) タイに関する先行研究のレビュー、(2) 日本に関する先行研究のレビュー、(3) 日本におけるプレ調査の実施を行う。26 年度には(1) 日本での調査実施、(2) 成果物としての論文執筆と投稿、(3) 日本のワークショップでの成果発表を行う。

本研究では、タイと日本それぞれにおいて、日本とタイそれぞれの津波後の観光は、観光地帯で生活する出稼ぎ労働者やエスニック・マイノリティにどのような影響をもたらしているかを検討することを目的とする。

本共同研究の意義は、「弱者救済における地域観光の有効性」について、2つの異なる文化や背景を持つ国々の事例を比較することから、より客観的で通用性の高い分析成果が期待されることにある。これまでも観光と弱者救済について検討する研究は多く存在したが、これを2カ国間の比較分析という視点から実施した先行研究は管見の限り少ない。本研究は5年来一緒に仕事をしてきた日本人研究者とタイ人研究者が比較分析を実施する点に、大きな意義を持っているだろう。

本調査研究では、(1) タイと日本それぞれにおいて、津波被害後の観光活動が「弱者」(外国人労働者や"異民族"労働者を含む)の復興と救済にどの程度役立ったのかについて、宮城県気仙沼市とプーケットの比較研究という面から事例が提供される。(2) 観光活動が「弱者」に役立った部分について、どのような条件下でそれが可能となるのかに関する分析結果が提示される。(3)「観光がローカルな弱者に恩恵を与えうるのか」という研究上の論題について、検討すべき新たな一側面からの研究事例が提供される、という3つの新たな知見を、既存研究に加えることができるのではないかと期待される。

A research group made up of two Japanese and one Thai will examine the extent to which tourism promotion after the 2004 and 2011 Tsunami disasters in Thailand and Japan, respectively, contributed to supporting a disadvantaged population (including foreign workers and ethnic minority workers) in each local area, and if it was useful, examine the conditions for such an achievement. Cases in Japan will be examined through fieldwork, and the results will be compared with existing research outcomes in cases in Thailand.

In 2013, we will (1) review former research on the topic in relation to cases in Japan, (2) review former research on the topic dealing with cases in Thailand, and (3) conduct pre-research in Japan. In the following year, we will (1) organize field research in Japan, (2) finalize research outcomes as a paper and apply to an academic journal, and (3) provide and present research outcomes in Japan.

The purpose of the study is to examine the impact of tourism promotion after the 2004 and 2011 Tsunami disasters in Thailand and Japan, respectively, on migrant workers and ethnic minorities who make a living in tourist areas in these countries.

The study will be pursued collaboratively in order to bring about more objective and applicable analytical results by comparing two countries with different cultures and backgrounds on the topic of "the effectiveness of tourism promotion in supporting disadvantaged population in the local area." Prior studies have been conducted on the relationship between tourism promotion and supporting disadvantaged population in local areas, but few have carried out a comparison of two countries.

The proposed study is expected to contribute in the following manner to the body of existing knowledge: (1) provide a comparative analysis of the cases of Kesennuma-shi, Miyagi Prefecture, and Phuket regarding the extent in which tourism promotion after the Tsunami disasters has helped out "the weak" (including foreign workers and ethnic minority workers); (2) present results of the analysis of the conditions under which tourism promotion can help out "the weak"; and (3) add to the literature on the research question "can tourism promotion be beneficial to "the weak" in local areas?" by providing a case study from a new analytical dimension.





津波 5 年後の観光地プーケットの海 Phuket 5 years after the Tsunami Disaster



資料共有型

植民地後期インドネシアの社会と経済に関する歴史資料の研究

A Study of the Historical Source Materials on the Society and Economy of Indonesia in the Late Colonial Era

植村泰夫(広島大学), 水野広祐(京都大学・東南アジア研究所), 藤田英里(立教大学・文学部)

Uemura Yasuo (Hiroshima University), Mizuno Kosuke (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Fujita Eri (Rikkyo University, Faculty of Letters)

研究概要 Outline of Research

本研究は植民地後期(19世紀初~20世紀前半)インドネシアの社会と経済に関する歴史資料の全体像を明らかにし、その中で重要なものについては解題を施すことを試みる。本研究の成果は様々な形で広く公開されるが、これにより基本史料へのアクセスがより容易になり、特にインドネシア史研究に従事しようとする若手研究者の助けとなることを目指している。

19世紀初めにオランダ植民地支配が本格化して以来、オランダが得たインドネシア現地社会に関する情報は急増した。オランダ支配が東インド会社時代から展開したジャワでは、間接統治から直接統治への転換の結果、村落内部の状況までもが収集された。外領でも19世紀中ごろからの支配拡大により、現地社会の把握は急速に進んだ。得られた情報は膨大な公文書、私文書の中に残されており、その一部は刊行されているが、大部分は未刊行でインドネシアやオランダの国立文書館などに収蔵されている。これまで若干の書誌学的検討が行われてきたが、インドネシア研究の現状に照らせば十分ではない。

加えて、当該期には多数の新聞、雑誌がインドネシアやオランダで発行されているが、当時のインドネシアに関する重要な情報を含むにもかかわらず、大半は史料として利用されておらず、その完全なリストもない。また20世紀には日本の手で各種調査が多数行われ、さらに近年の歴史研究では現地語史料の利用も始まっているが、その史料学的検討は十分ではない。

本研究は、これらの歴史資料の全体像を可能な限り把握し、重要な資料について解題を行うことを目的とする。これによりインドネシア史研究の各課題にどのような歴史資料が必要かが明らかにされる。このことは、特にインドネシア研究をこころざす若い世代に大きな手がかりを与え、日本におけるこの分野の研究の発展に役立つであろう。



Verslag van de Handels-Vereeniging te Soerabaja,1905 (スラバヤ商業協会報告書 1905 年版)、インドネシア経済史の最重要史料の1つ。

Verslag van de Handels-Vereeniging te Soerabaja, 1905 (Report of the Trade-Union at Soerabaja, 1905), one of the most important sources of the economic history of Indonesia

This project aims to give a general overview of the historical sources available on the society and economy of Indonesia in the late colonial era (from the beginning of the 19th to the middle of the 20th century) and make bibliographic introductions of the most important ones. The results of the study will be made available to the public in various ways, and we hope that these will make access to primary source materials much easier than present and in particular, help young scholars who will study Indonesian history.

From the beginning of the 19th century, when Dutch colonial rule penetrated deep into Indonesian society, the information available to the Dutch rapidly increased. Namely, in Java, where Dutch rule was already established during the time of the Dutch East India Company, even the affairs in villages were open as a result of converting indirect rule into direct one. Furthermore, in the Outer Islands, expansion of colonial rule from the middle of the 19th century increased Dutch knowledge of local society there. This knowledge came in the form of abundant official and private documents, which were partly published but mostly unpublished and preserved in the National Archives of Indonesia and the Netherlands. There have been some bibliographical studies conducted on these documents, but they are insufficient for Indonesian studies. In addition, during this period, various newspapers and periodicals were published in Indonesia as well as in the Netherlands. However, most of these, which contain important information on Indonesia at the time, have not been used as historical sources, and there are no complete lists of them. Furthermore, in the 20th century, Japan conducted a lot of surveys on various Indonesian issues and recent historical studies began to utilize local language documents as historical sources. Yet, to date, there are no sufficient bibliographical studies on them. This study aims at gaining a general view of these historical sources and tries to give bibliographical introductions to the most important ones. By doing so, this study will clarify which historical sources should be consulted with the study of various subjects. In particular, this will help a younger generation who will study Indonesia, and contribute to the development of studies in this field.



Perpustakaan Nasional Indonesia(インドネシア国立図書館)の読書室。ここでは他の図書館には所蔵されていない多くのインドネシア関係図書を閲覧できる。

One of the reading rooms of the Perpustakaan Nasional Indonesia (Nasional Library of Indonesia) in Jakarta, where we can read a lot of books on Indonesia which cannot be found in other libraries



資料共有型

インドシナ戦争期北ベトナム逐次刊行資料保存・利用環境の整備

Improvement of the Infrastructure for Utilization and Preservation of Periodicals in North Vietnam during Indochina War

岩月純一(東京大学・大学院総合文化研究科),小島浩之(東京大学・大学院経済学研究科),木谷公哉(京都大学・東南アジア研究所),大野美紀子(京都大学・東南アジア研究所),石川一樹(東京大学・東洋文化研究所),末成道男(東洋大学・アジア文化研究所),遠藤 聡(共立女子大学・国際学部)

Iwatsuki Junichi (The University of Tokyo, Graduate School of Arts and Sciences), Kojima Hiroyuki (The University of Tokyo, Graduate School of Economics), Kitani Kimiya (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Oono Mikiko (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Ishikawa Kazuki (The University of Tokyo, Institute for Advanced Studies on Asia), Suenari Michio (Toyo University, Asian Cultures Research Institute), Endo Satoshi (Kyoritsu Women's University, Faculty of International Studies)

研究概要 Outline of Research

近年ベトナムでは、ベトナム国家図書館や国立公文書館などの各研究機関において所蔵史・資料のデジタル化が急速に進展しているが、その主たる対象は漢文・チューノム文献に偏向しており、近現代の逐次刊行物、とりわけインドシナ戦争期に刊行された雑誌・公報等の保存が看過され、急速に劣化し消滅の危機に瀕している。本研究は、日越両国の歴史研究者のネットワークを介し、デジタル化による保存対策と適正な環境における公開を進め、日本におけるベトナム研究の発展に寄与すべく資料を招来する。

本研究が招来する「インドシナ戦争期北ベトナム逐次刊行物コレクション」はインドシナ戦争中に北ベトナムで刊行された教育、歴史・地理学、文学関係の学術及び一般雑誌から成る。この時期の資料は、日本国内外の研究機関ではなお体系的・網羅的に所蔵されておらず、ベトナム本国においても適切な資料保存がなされていない。また、資料保存の有効な手段であるデジタル化は進捗していない一方で、非正規なデジタル化データが内部関係者を通じてインターネットに流出する事態が生じている。この背景にはデジタル資料の公開・利用に係る法的・情報技術的基盤環境が整っていないことが挙げられる。本研究は、招来した資料を灰色文献化することなく、図書館・公文書館が準備する適正な運用環境のもとで、すべての利用者に対して平等に公開することを目的とする。

本研究が招来するコレクションによって、日本国内では一部の南ベトナム資料に偏向していた従来の資料収集状況が一新され、当該時期のベトナム全体の社会研究が可能となる。たとえば官報(Công báo)は、サイゴン政権のものがいくつかの日本の大学に分蔵されているが、北ベトナムの官報、特に1945年から50年にかけての"Việt Nam Dân quốc Công báo"は所蔵がなく、公開されたデジタル版もない。こうした基礎的な史・資料の整備は、これまで国外での長期滞在なしでは不可能だった詳細な文献調査を容易にし、ベトナム近代史研究の深化に寄与するだろう。

VIÈTANI BINCHE CONCION

VIÈTANI DÀN - QUỐC CANCELLO

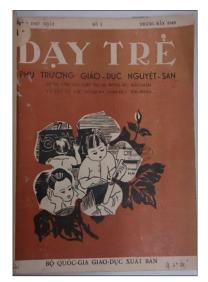
VIÈTANI DÀN - QUỐC CA

ベトナム社会科学アカデミー付属社会科学通信院図書館所蔵雑誌から: 『ベトナム民国公報』(ベトナム民主共和国最初の官報。第2号、1945年10月6日) First Official Gazette of the Democratic Republic of Vietnam, No.2, 6 October, 1945. (Owned by the Library of Social Sciences and Informations attached to Vietnam Academy of Social Sciences) Vietnam in recent years has many research institutes such as National Library and Archives which have promoted the digitization of historical materials. However, almost all those projects tend to focus on Hannom materials, overlooking periodicals from the modern periods, especially those published during the Indochina wartime such as magazines and gazettes which have deteriorated and face the possibility of disappearing. This project aims to bring these materials to Japan, open to public use under adequate circumstances, and contribute to the progress of Vietnamese studies in Japan.

This project aims to bring into the public domain "The collection of Periodicals in North Vietnam during the Indo-China war period," which consists of general academic magazines that deal with history, geography, literature, and so on. These materials are not in the systematic possession of organizations inside and outside Japan, nor are they preserved adequately in Vietnam itself.

This project aims to normalize these materials under adequate circumstances in libraries and archives, and to ensure open access for all users.

This collection will renew the situation of materials on South Vietnam, and hopes to open up a path to Vietnamese society. For example, Cong Bao- an official gazette of South Vietnam, are available in some universities in Japan, but those of North Vietnam in 1945-50 are not available either digitally or in hard copy. Collecting these basic materials will facilitate and contribute to deepening Vietnamese modern historical studies.



ベトナム社会科学アカデミー付属社会科学通信院図書館所蔵雑誌から: 『教育月刊付録: 幼児教育』(第一次インドシナ戦争期フランス占領下のハノイで出版された 国家教育省発行の雑誌。第1号、1950年7月)

Early Childfood Education: Supplement to Monthly Education, No.1, July, 1950. (Issued by the Ministry of National Education in Hanoi occupied by the French during the First Indochina War. Owned by the Library of Social Sciences and Information attached to Vietnam Academy of Social Sciences)



資料共有型

新たな植民地資料利用の展望――シンガポール、マレーシア国家の史的起源をめぐって

New Perspective of Colonial Office Records: Searching for the States of "Singapore and Malaysia" in the Colonial Era

河野元子(政策研究大学院大学・政策研究科), 坪内良博(名誉教授(京都大、甲南女子大)), 左右田直規(東京外国語大学・大学院総合国際学研究院), 鬼丸武士(政策研究大学院大学・政策研究科), 原洋之介(政策研究大学院大学・政策研究科), 篠崎香織(北九州市立大学・外国語学部), 岡本正明(京都大学・東南アジア研究所)

Kawano Motoko (National Graduate Institute for Policy Studies, Graduate School of Policy Studies), Tsubouchi Yoshihiro (Professor Emeritus), Soda Naoki (Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies), Onimaru Takeshi (National Graduate Institute for Policy Studies, Graduate School of Policy Studies), Hara Younosuke (National Graduate Institute for Policy Studies), Graduate School of Policy Studies), Shinozaki Kaori (University of Kitakyushu, Faculty of Foreign Studies), Okamoto Masaaki (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

シンガポール、マレーシア国家の史的起源をめぐる研究の多くが、現代の国家の枠組みを過去に投影しており、海峡植民地とマレー半島部を一体として英領マラヤ総体を把握しようとした研究はあまりない。現代の両国家の成り立ちを考察する時、その前史となるイギリス植民地「英領マラヤ」とは一体いかなるものであったのかについての理解は不可欠である。本研究は、このような視座に立って植民地資料の新たな活用の可能性を模索・提示するとともに、植民地の国家機構と社会のあり方を再考し、そこから現在の国家への展望を得ることを目指す。

Most researches on the history of Singapore and Malaysia have projected the framework of the two modern states onto the past, and there is hardly any research trying to figure out British Malaya as a unity of Straits Settlements and Peninsula Malaysia. When we consider the state formation of modern Singapore and Malaysia, it is essential to understand what was "British Malaya." From these viewpoints, this research project aims to re-examine the state and society in British Malaya in order to identify their succession to modern Singapore and Malaysia. The research project also proposes a new perspective of the utilization of the colonial office records.

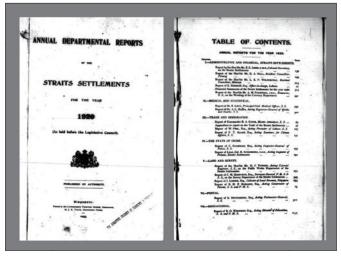
東南アジア研究所図書室には、英領植民地関係のマイクロ資料 (海峡植民地部局別年次報告書、英領マラヤ連邦州および非連邦州 年次報告書、CO273 文書等)が保管されている。これらの資料を 活用した海峡植民地および英領マラヤの歴史に関する研究は、経 済史、社会史、政治史など各分野で豊かな蓄積をもつ。しかし、 資料の扱いについても、研究対象においても分化していることは 否めない。これに対して、本研究では歴史学、政治学、経済学、 社会学、資料学の専門家の共同研究により、英国植民地国家およ び社会の特性を総合的視座より通時的に整理・分析することで明 らかにしていく。国家機構の編成、植民地行政、社会構造の変化 の分析を通して、植民地資料利用の新たな可能性を提示するとと もに、英国植民地マラヤの全体像すなわち「植民地」とは何だっ たのかを再考することを目的とする。一方で、現在の国家への連 続性、非連続性を検討する。

とりわけ海峡植民地年次報告書は、植民地国家の運営・管理を知るために重要な、機構・制度・財政・社会に関する詳細な状況と統計数値を記載していることに特色がある。部局構成、インフラ整備、警察体制、医療制度、教育制度はじめのデータベース構築、具体的な流れ図の作成、各専門分担者の作業のすり合わせにより、植民地国家の完成像を明示することが期待できる。

東南アジア研究所図書室所蔵の海峡植民地年次報告書マイクロ資料(マレーシア国立文書館所蔵マイクロ資料より複写)には一部欠損があるが、研究期間中に英国国立文書館から資料入手を行うことで、保管資料の充実をはかる。一方、データベース、流れ図など作成した資料は公開開示をめざすもので、このことで研究所保存資料の活用をさらに拡大させることになろう。

The CSEAS Library has housed microfilms of the colonial administration of British Malaya; i.e. the annual reports of the Straits Settlements, the Federated Malay States, and the Unfederated Malay States, and Colonial Office Record 273, etc. These records have been used not only in the field of history, but also economy, political sciences, sociology and anthropology. Though various studies have accumulated rich outcomes in each area, they are too differentiated and specialized. In contrast, we will undertake a joint research activity among historians, political scientists, economists, and sociologists as well as archivists from a chronological and comprehensive perspective, and clarify the characteristics of state and society in British Malaya through analyzing these records.

The annual reports of the Straits Settlements form our core sources, and contain unique descriptions and statistics related to national institutions, administrative organizations, government budgets and various social aspects. It will be possible to figure out the administrative operation of a colonial state and its social transformation. To facilitate the research, we plan to construct a database and flow-charts concerning the colonial administration, police systems, educational characteristics, health status, and nucleus infrastructures. The database and flow-charts will be open the public.



海峡植民地年次報告書 1913 年(表紙と目次部分) Annual Reports of Straits Settlements for the year of 1913 (Front and Contents)



海峡植民地シンガポール・ペナンの絵葉書(1910 年~1930 年頃) Postcards of Singapore and Penang (c 1910-1930)



文化遺産情報のシステム化とオントロジー構造による Local Knowledge の理解

Reconstruction of Local Knowledge by Using Informatics in Cultural Properties

津村宏臣 (同志社大学・文化情報学部),**柴山 守** (京都大学・地域研究統合情報センター),**小林 知** (京都大学・東南アジア研究所)<mark>,田代亜紀子</mark> (奈良文化財研究所・ 企画調整部)

Tsumura Hiroomi (Doshisha University, Faculty of Culture and Information Science), Shibayama Mamoru (Kyoto University, Center for Integrated Area Studies), Kobayashi Satoru (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Tashiro Akiko (Nara National Research Institute for Cultural Properties, Department of Planning and Coordination)

研究概要 Outline of Research

本研究では、11世紀以降ベトナム諸王朝の中心都市でありつづけたハノイについて、その歴史都市景観に関する時空間的な情報基盤を STIS を基本とした時空間情報科学の方法と技術によって構築し、情報相互のオントロジー構造を基盤とした新しい文化景観研究を推進することを目的とする。 昨年度実施した、国土座標系が不詳の現状の歴史地図類のアーカイブと補正を実施に追加し、累積する都市構造の時系列での変遷を定量的に評価、その傾向と法則性から歴史文化の理解を深める。

The purpose of this research is to reconstruct a historical cultural landscape of Hanoi by using spatiotemporal informatics which are based on STIS. Specifically, it will be carried out in the following ways

- · Digitization and STIS archive of historical map materials
- Quantification of time series changes of a city structure
- Restoration of the history and culture based on a model evaluation
- · Reconstruction of the Hanoi Time Landscape for understanding history

世界遺産として登録されているタンロン遺跡は、現在も発掘調査が継続的に進められており、関連する文献や古地図類の多様な情報も存在する。現状では、それらは有機的に結びついておらず、1つの文化景観を紡ぎ出せていない。この研究では、発掘成果もあわせた多様な時空間情報を1つの情報基盤(STIS:津村研究室にて特許出願済み)に格納し建造物配置と都市構造の時系列変遷について明確にする。次いで、文献調査を実施し、併せて発掘調査成果からそれらの事実の確認を行い、その相互の関連を評価する。フランス統治下における都市計画と歴史景観を総合評価し、ハノイ都市形成史を考察することを目的とする。

昨年度は、ベトナムの国土情報基盤の混乱の改善のため、現地機関と連携し、空間情報拠点を計測し、この成果を報告した。また、研究者招聘には至らないものの、タンロンセンターにおいて若手研究者を対象とした GIS データ、技術に関連するセミナーを開催し、文化遺産情報のアーカイブに関する共通理解と共有化を深めた。

本研究の結果、(1) 11世紀から現代に至るまでの、ハノイの古地図・絵図・文献資料などに関する統合情報基盤が構築され、(2)公開可能なWebSTISの形で情報基盤をCSEASに構築することができる。これを利用して、単に地図を比較して質的情報の断続的変化によって歴史や景観を理解するだけでなく、(3) タンロン遺跡を中心とした歴史環境変遷について定量的な評価を実施し、(4)その歴史・文化的な背景について考察を可能とする。また、(5)新規の現地測量調査を実施することで、都市構造評価のための軸線評価を実施でき、結果として9世紀以降の東アジア全体の都市形成史との比較文化研究に大いに資することが予測される。

With the Imperial Citadel of Thang Long, Hanoi, we can approach many historical records which are in the form of maps, texts, and drawings. However, it is not easy to verify their mutual relations since they are archived in separate places and formats.

In this research, we aim to reclaim how to unify them at the dimension of information with spatio-temporal informatics and by using STIS. In particular, no research has been carried out on the unification of excavation survey data. Thus, the purpose of this research is to reconstruct a historical cultural landscape of Hanoi using these methods.

An additional advantage of this research is to create an information system. Doshisha University will apply for patents and Kyoto University will prepare the data server, input all data, and open it to the public.

We expect the following research results.

- The completion of an integrated intelligence infrastructure about Hanoi.
- Open promotion through WebSTIS technology.
- Quantitive understanding of the historical changes of the environment of Thang Long.
- Consideration of the cultural background of Thang Long.
- Measurement to study and evaluate the city structure.



モバイル GPS 較正キットによるタンロン城壁の測量 DGPS measurement of the wall with mobile GPS calibration kit.



タンロン宮城測量基準点の GPS スタティック測位の講義
Lecture about the grand control point survey with static method



ミャンマー経済発展のためのロードマップと政策に関する研究

萌芽型

Study on Roadmap and Policy towards Economic Development of Myanmar

岡本郁子(日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター), **藤田幸**一(京都大学・東南アジア研究所), 三**重野文**晴(京都大学・東南アジア研究所), 工**藤年博**(日本貿易振興機構アジア経済研究所・ERIA支援室), 中西嘉宏(京都大学・東南アジア研究所)

Okamoto Ikuko (Institute of Developing Economies-JETRO, Area Studies Center), Fujita Kouichi (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Mieno Fumiharu (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Kudo Toshihiro (Institute of Developing Economies-JETRO, ERIA Support Office), Nakanishi Yoshihiro (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

2011 年央以降、ミャンマーでは新しく成立した文民政権の下で経済改革の機運がかつてなく高まっている。財政・金融、工業、農業分野などで広範囲かつ抜本的な改革を含むだけでなく、改革に関与するアクターが多様化している点に大きな特徴がある。本研究は、具体的な政策の展開とそれに関わるアクターの分析を通じて、ミャンマーが目指すべき経済発展の方向性を明らかにすることを目的とする。

ミャンマーは市場経済への移行を唱えながらも、国際社会からの孤立と社会主義的遺制を強く残す恣意的な経済運営の影響で、経済は長らく低迷してきた。2011年の新政権樹立後も抜本的な経済改革には懐疑的な見方が大宗を占めていたが、年央からの政治改革の動きと平行して、政府、国会、そして民間レベルで改革の議論が活発化するようになった。そこには、複数為替制度問題、農地法や外国投資法の改正など、軍政下では先送りされてきた重要な改革も含まれる。また、政治改革の急進展を受けて、欧米の経済制裁解除や国際的経済支援が拡大している。これらの結果として、ミャンマー経済が短期間で大きく変容する可能性が広がってきた。

しかしながら、2015年の総選挙までに具体的な成果を出すと同時に、国際経済・社会への復帰を急ぐあまり、全体的構想が曖昧なまま性急な改革が打ち出されている嫌いもある。そこで本研究では、経済改革に向けた政策とその展開、そしてそれを牽引するアクターを分析することによって、ミャンマー経済発展のあるべき方向性を描くことを目的とする。それにあたっては、ミャンマー特有の政治・経済体制の歴史的変遷を視野に入れることで、同国の経済発展プロセスの総合的な理解の深化と、世界の対ミャンマー支援に有用となる基礎的知識を提供することも目指す。

ドライゾーンで除草作業中の労働者 Agricultural labourers working in the dry zone

Since mid-2011, economic reforms have been gathering momentum under the new government in Myanmar. The reforms currently under consideration not only cover a wide range of sectors, such as fiscal and monetary, industrial and agricultural sectors, but also include sectors which the previous governments dared not engage with. Another striking characteristic is that these reforms involve various types of actors in the economy, who were never observed before. This study aims to identify the economic development path which Myanmar should pursue, through an analysis of the development of reforms and its relevant actors.

Despite its advocacy for transition to a market economy, Myanmar's economy has been flagging for a long time, because of its isolation from the international community as well as long-standing mismanagement of the economy, rooted back in the socialist regime. Even upon the establishment of the new government in 2011, a majority held the skeptical view that no fundamental economic reforms would be carried out in the immediate future. However, along with political reconciliation since mid-2012, discussion on economic reforms among the government, parliament, and private sector has become a vigorously debated topic. These include very critical reforms which were long overdue under the military regime, such as the issue of multi foreign exchange regimes, the enactment of a new farmland law and a revision of foreign direct investment law. With the sudden progress of political reforms, relaxation of economic sanctions by Western countries as well as an increase in international economic assistance is highly expected. As a consequence, Myanmar's economy may have a chance to transform itself drastically within a very short time.

There is an impression, however, that these reforms are not been thoroughly contemplated and lack a holistic framework, as the new government is in a rush to achieve concrete outcomes before the scheduled general election in 2015, and to return to the international community. Therefore, this study will analyze policies towards reforming its economy as well as its actual development, together with the actors who lead these reforms, so that the proper economic development path which is suitable to Myanmar, can be identified. In doing so and by considering the historical transformation of political and economic regimes that is unique to Myanmar, the study aims to deepen comprehensive understanding of the country's economic development process and to provide basic knowledge which can enhance the effectiveness of international economic assistance.



街角で新聞を立ち読みする市民 Reading newspapers on the street



平成24年度 FY2012

日本の焼畑に受け継がれてきた在来知の現代的意義 ――東南アジアとの比較視座からの検討――

萌芽型

Contemporary Significance of Local Knowledge inherited in Japanese Swidden Agriculture: View from the Perspective of Southeast Asian Studies

鈴木玲治(京都学園大学・バイオ環境学部),**黒田末壽**(滋賀県立大学),**安藤和雄**(京都大学・東南アジア研究所)

Suzuki Reiji (Kyoto Gakuen University, Faculty of Bio-environment), Kuroda Suehisa (The University of Shiga Prefecture), Ando Kazuo (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

伝統的な焼畑は原始的・環境破壊的な農法ではなく、作物栽培と森林再生をうまく組み合わせた合理的・循環的な農法である。本研究では、文献調査、参与観察、聞き取り調査により、日本の焼畑に受け継がれてきた技術や知恵を体系的にまとめなおし、東南アジアにおけるこれまでの研究蓄積と比較検討しながら、日本の中山間地域の食糧生産にこれらの技術や知恵を活かす手段を検討し、循環型社会・脱化石燃料社会に求められる生業モデル構築のための基礎資料を提示する。

Traditional swidden cultivation is not a primitive and environmentally destructive form of agriculture, but a rational and sustainable agriculture system in which forest recovery after slash-and-burn and crop production can be well harmonized under long fallow periods. In this study, we will reconstruct local knowledge and skills inherited in Japanese traditional swidden agriculture through a bibliographical survey, participant observation and interviews to examine the potential of swidden as a form of environmentally sustainable agriculture in intermediate and mountainous areas of Japan. Various outcomes of previous studies on swidden in Southeast Asian countries will also be reviewed for comparative discussion. The goal of this study is to present fundamental data for building up a lifestyle model toward a more recyclable and fossil fuel independent society.

大量生産・大量消費型社会に伴う諸問題の克服には、最先端の技術革新に加え、これらの問題が顕在化する以前の生業の中で、経験的・伝統的に培われてきた技術や知恵に学ぶことも必要である。本研究では、東南アジアと日本の焼畑の比較を通じ、山地の生態資源を活かした循環的な食糧生産手段としての焼畑の現代的意義を問い直し、循環型社会・脱化石燃料社会に求められる生業モデル構築のための基礎資料を提示する。日本各地には、伝統的な焼畑が今なお継承されている地域がわずかに残るが、そこで焼畑を営む人々の大半は高齢で、後継者もほとんどいないのが現状である。彼らの記憶に刻まれた豊富な知識や経験を最大限に引き出して記録に残していくことは、学術的にも意義が大きく、循環型社会・脱化石燃料社会を構築する上でも、極めて意義深いものである。

焼畑で栽培される作物は日本の食卓に並び得ないわけではなく、現在は、より安価に生産された作物にとって代わられているに過ぎない。戦後の燃料革命により、その役割をガスに奪われた薪炭とは、この点が決定的に異なる。特に、現在の日本の焼畑で栽培されている主要な作物であるカブは、焼畑で育てた方が品質がよいといわれており、温海カブや藤沢カブなど、様々なブランドのカブが栽培されている。地域の自然を活かした特産品の生産、無農薬農業や地産・地消の重視など、市場経済原理とは異なる価値を付加することで、焼畑の技術や知恵を活かした新たな生業モデルの構築に寄与する成果が期待される。

To overcome various problems which became obvious in recent consumeristic society, it is important to not only look at cutting-edge innovative science and technology, but also learn from knowledge and skills inherited in traditional human livelihood. In this study, we will examine the contemporary significance of Japanese swidden agriculture as a form of environmentally sustainable agriculture in intermediate and mountainous areas of Japan.

In some areas of Japan, local people still engage in traditional swidden cultivation. However, most of these people are of an advanced age and there are few successors who can continue swidden cultivation. It is quite important both academically and practically, to record their plentiful knowledge and skills before Japanese swidden agriculture disappears as a practice.

From fundamental data accumulated through a bibliographical survey, participant observation and interviews, we will extract useful information that can help build up a lifestyle model toward a more recyclable and fossil fuel independent society.



スギ皆伐跡地での焼畑によるカブ栽培(新潟県村上市山北)

Turnip cultivation by swidden agriculture after clear felling of Japanese cedar plantation (Sanpoku, Murakami city, Niigata prefecture)



焼畑の火入れ(滋賀県長浜市余呉) Burning of swidden agriculture (Yogo, Nagahama city, Shiga prefecture)



ムラピ山における大規模噴火後の景観復興過程

Rehabilitation of Landscape after the Eruption of Mt. Merapi

嶋村鉄也(愛媛大学・農学部)、市川昌広(高知大学・農学部)、甲山 治(京都大学・東南アジア研究所)、伊藤雅之(京都大学・東南アジア研究所)

Shimamura Tetsuya (Ehime University, Faculty of Agriculture), Ichikawa Masahiro (Kochi University, Faculty of Agriculture), Kozan Osamu (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Ito Masayuki (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

本研究は2010年に大規模噴火を起こしたインドネシア・ジャワ島にあるムラピ山における一次遷移と景観の回復過程を追跡し、今後の熱帯域における災害復興と環境利用のあり方を提示するものである。本研究では、国立公園とその周囲の住民による限定的利用が認められたバッファーゾーン、住民による耕作地、屋敷林における住民の生業および、土地利用、資源利用様式、植生回復などの調査を行い、繰り返されて来た大規模撹乱に対して住民がどのように対応してきたかを解明する。

The objective of the study is to reconsider land and resources management and the rehabilitation of landscapes in the tropics by looking at the rehabilitation and succession of landscape around Mt. Merapi, which erupted in 2010. Land allocation, land management and successions after the disturbance will be monitored in four types of landscape: 1) the core zone of Mt. Merapi National Park, 2) a buffer zone of the national park where local people's activities are restricted, 3) slope farmlands and 4) home gardens managed by local people. By comparing the land management of these areas, we will clarify how local people have managed the disaster.

研究目的

本研究はムラピ山における一次遷移と景観の回復過程を追跡し、今後の熱帯域における環境利用のあり方を提示することを目的とする。現在のムラピ山では、(1)天然更新を促進する国立公園内のコアゾーン、(2)限定的に住民利用を認めたバッファーゾーン、(3)住民による耕作地、(4)屋敷林などが代表的景観として確認されている。2010年の大規模噴火により打撃を受けた、これらの景観における住民の生業および土地利用、復興に向けた習慣・制度の解明、物質循環などの調査を行い、学際的な視点から統合し、その景観の回復過程を明らかにし、ムラピ山における復興型の資源利用方式を提示する。

研究の意義・期待される効果

ムラピ山では 4~5 年間隔で噴火がおき、その景観は大規模撹乱をうける。この撹乱に対して住民はその環境に対する深い造詣を活用し、復興を成し遂げてきた。このような高頻度の撹乱を克服し続けてきた、ムラピ山における住民の生業は、今後の熱帯域における環境の利用法として技術的にも、社会システム的にも重要な示唆を含むものである。このシステムを解明するところに本研究の意義がある。

今後の資源利用のあり方は、人類が抱える大きな課題である。 本研究では、ムラピ山の復興過程を「強度の撹乱に対してもその 機能を失わない資源利用システム」と位置づけ、それを科学的に 解明する。例えば、技術的には自然の復元力の活かし方を植生遷移・ 物質循環系の解明により明らかにし、復興に向けた制度・習慣を 明らかにする。これにより、天然資源の復元力を活かした資源利 用システムの構築に向けた有効な知見を得ることが期待される。



噴煙により枯れた木と土石流のあと Trees wither due to heat gas and debris flow in affected areas

The objective of the present study is to reconsider the land and resource management and rehabilitation of landscape in tropics by monitoring primary succession and rehabilitation of landscape. On the slope of Mt. Merapi, there are four kinds of land use: 1) a core zone of Mt. Merapi National Park where natural succession is expected, 2) a buffer zone of the national park where local peoples activities are restricted 3) slope farmlands and 4) home gardens of the people. These landscapes were severely damaged by the eruption of Mt. Merapi in 2010. In the present study, we will monitor the rehabilitation processes of the landscapes by investigating land management, land use, local custom and regulations, biogeochemical cycles and forest succession. The results will be integrated to clarify the rehabilitation process and applied to propose a better resource management system.

Mount Merapi is an active strato-volcano located on the border between Central Java and Yogyakarta, Indonesia. It is the most active volcano in Indonesia and has erupted regularly at four or five year intervals. Local people have helped the landscape recover from repeated disasters. In this sense, natural resources management of Mt. Merapi can be regarded as a system that overcomes severe and repeated disasters. This system has important implications in achieving sustainable environmental management in both technical and social aspects.

In the present study, we regard the recovery processes of Mt. Merapi as a resource management system which is robust against intensive disturbance and aim to clarify the system. The outcome of the study expects to propose a novel natural resource management system.



地域住民はムラピ山を観光資源として利用している Local people treat Mt. Merapi as a tourist spot



アジアの棚田稲作における持続的農法と棚田保全に関する研究

Study on Sustainable Agriculture in Terraced Rice Cultivation and Rice Terrace Conservation in Asia

安藤和雄(京都大学・東南アジア研究所), 中村均司(フリーランス研究者), 李 成雲(雲南農業大学・農業生物多様性応用技術センター), Yezer (ブータン王立大学・シェルブツェ単科大学), 内田晴夫(独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構・近畿中国四国農業研究センター)

Ando Kazuo (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Nakamura Hitoshi (Freelance Researcher), Li Cheng-yun (Yunnan Agricultural University, National Center for Agrobiodiversity), Yezer (Royal University of Bhutan, Sherubtse College), Uchida Haruo (National Agricultural and Food Research Organization, NARO Western Region Agricultural Researach Center)

研究概要 Outline of Research

東南アジアを含むアジアの棚田では、各地域の生態的環境に応じた持続的な農業が行われており、食糧生産をはじめとし、地域景観と多様な文化をはぐくんでいる。本研究では、日本の丹後・但馬地域、能登・佐渡、高知県、京都府、滋賀県の棚田、アジアでは中国雲南ハ二族の棚田とブータンの棚田を中心に、文献調査・現地調査を行い、資源循環と環境調和、生物多様性などの観点から持続的稲作農法の意義と課題を明らかにし、併せて棚田保全と地域開発の方向について実践型研究を行う。

東南アジアを含むモンスーンアジアの棚田では、近代農業技術が展開しきれない条件下で、各地の生態環境に応じた持続的な農法が存在し、多様な稲作文化を形成している。伝統的な農業や文化風習、生物多様性の保全を目的に国際連合食糧農業機関(FAO)が認定する「世界農業遺産(GIAHS)」に新潟県の佐渡と石川県の能登が選定され(2011年6月)、アジアの棚田と伝統的な農法が注目されてきているが、フィリピンのイフガオの棚田が危機遺産に指定されるなど、棚田の保全が危ぶまれているところも少なくない。

本研究は、日本とアジアの棚田稲作の現況と課題について、資源循環や環境調和、生物多様性、農村開発などの視点から調査研究を行い、比較・分析を通して、それらの農法の特徴を明らかにすることを目的にする。さらに、伝統的農法の継承に配慮しながら、現代農業技術と組み合わせた持続的な農法および棚田の保全と地域開発の方向を構築する。

資源循環型の持続的な農法の構築は棚田地帯だけでなく、アジアの稲作全体に波及する可能性があり、持続的な農村地域の開発ならびに多様な文化の維持・交流に寄与することが期待できる。また、本研究での成果はアジアの棚田や水田農法の調査研究にも適用することが期待できる。さらに、棚田保全と地域開発の実践型研究の成果は、GIAHSやアジアの棚田の維持・保全、稲作の発展と地域開発の指針となりうる。



ブータンの棚田。ブータンでは大麦やトウモロコシにかわって現在米の主食化が進んでいる。ブータンでは水田は、そのほとんどが棚田である。そして、山国のブータンでは、棚田は貴重で、法律で守られている。その転用や耕作放棄は安易には認められていない。人間の労働投入の証である美しい棚田は今も健在である。2012 年 9 月リンメタンからモンガールの途中で安藤が撮る。

Rice Terrace in Bhutan. Rice become presently staple food instead of baley and corn. Most of rice fields in Bhutan are rice terraces. Bhutan is a mountainous country. A rice terrace is important and thus is protected by the law. It cannot be easily permitted to be used for other purposes or abandoning farming. The beautiful rice terraces, which are a proof of accumulation of human labors, are well seen to us. This photo was taken at the place between Linmetang and Mongar, Bhutan, by Ando Kazuo.

Rice terraces in Asia, including Southeast Asia, have their own sustainable agriculture according to ecological specificities found in the region. These nurture food production, specific landscapes, and cultures.

This study aims at field studies and literature survey on rice terraces located in Kyoto, Shiga, and Kochi Prefectures as well as the Tango-Tajima area of Japan, Hani in Yunnan China and Bhutan to elucidate the implications of resource-recycling, environmental friendliness, conservation of biodiversity, all of which lead to the sustainable development of rice terraces and local communities.

In rice terraces found in an Asiatic monsoon climate, modern agriculture could not be developed, thus various rice farming and cultivation practices were established to meet the local needs, particularly specific ecological requirements. The Food and Agricultural Organization (FAO) recognized GIAHS was recently approved to include Sado island and Noto Penisula (June 2011). Asiatic rice terraces and the traditional cultivation methods have thus been re-discovered in terms of their environmental and biodiversity sustainability. Nevertheless, some rice terraces face maintenance difficulties.

This study includes a field survey on the current conditions of Japanese rice terraces as well as those found in other Asiatic countries in terms of resource-recycling, environmental friendliness, conservation of biodiversity and community development. It aims to clarify and characterize local specificities of traditional cultivation practices through a comparative analysis of data. Furthermore, it aims at a realistic community development plan and implementation agenda to combine farming methods based on both modern and traditional systems and concepts.

Resource-recycling typed sustainable cropping systems can be extended to general rice cultivation and do not need to be restricted to rice terraces. Their potential value must merit further attention. The expected results will contribute to studies on other types of Asiatic rice terraces and traditional cultivation practices and can help GIAHS, conservation, terrace maintenance, rice production, and community development as a whole.



山口県周防大島町の棚田。40-50 年ほど前から日本では高度経済成長とともに、都市への人口移動が顕著となり、中山間部の村々での過疎化と高齢化が進んだ。そして、耕作放棄されたり、林地への転用が当たり前のように行われるようになってしまった。写真は2009 年9 月に安藤が撮った。奥から、耕作される棚田、放棄された棚田、果樹が植えられた棚田である。

Rice terraces in Suo-Oshima-cho, Yamaguchi Prefecture, Japan. The migration from rural to urban has been accelerated in accordance with rapid economic development in Japan since 1960s. The problem of de-population and aging societies has deteriorated too. The phenomena of abandoning farming and changing a rice terrace to a forest land has become common in the mountainous villages in Japan. This photo was taken in September 2009 by Ando Kazuo. The inner place is cultivated land. The middle place is abandoned farming land. The near side is fruit-tree land.



東南アジア交易史における「長期の19世紀」

萌芽型

"The Long Nineteenth Century" in Southeast Asian Trade History

杉原 薫(政策研究大学院大学・政策研究科)、水野広祐(京都大学・東南アジア研究所)、川村朋貴(東京大学・大学院人文社会系研究科)、太田 淳(広島大学・大学院文学研究科)、西村雄志(関西大学・経済学部)、久末亮一(日本貿易振興機構アジア経済研究所・新領域研究センター)、宮田敏之(東京外国語大学・大学院総合国際学研究院)、柿崎一郎(横浜市立大学・国際総合科学部)、島田竜登(東京大学・大学院人文社会系研究科)

Sugihara Kaoru (National Graduate Institute for Policy Studies, Graduate School of Policy Studies), Mizuno Kosuke (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Kawamura Tomotaka (The University of Tokyo, Graduate School of Humanities & Sociology), Oota Atsushi (Hiroshima University, Graduate School of Letters), Nishimura Takeshi (Kansai University, Faculty of Economics), Hisasue Ryouichi (Institute of Developing Economies, JETRO, Inter-disciplinary Studies Center), Miyata Toshiyuki (Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies), Kakizaki Ichiro (Yokohama City University, International College of Arts and Science), Shimada Ryuuto (The University of Tokyo, Graduate School of Humanities and Sociology)

研究概要 Outline of Research

18 世紀末から 20 世紀初頭にかけての東南アジアでは、植民地化と世界経済への統合のなかで、域内交易が、他地域と比較しても注目すべきスピードで持続的に成長した。本研究会は、先行の萌芽研究(後述)の成果を受け継ぎ、独自の交易ネットワークや市場制度を発達させた域内交易の成長という視点から東南アジア交易史を捉えなおすことによって、「長期の 19 世紀」をまとまりとする新たな歴史像の提示を目的とする。

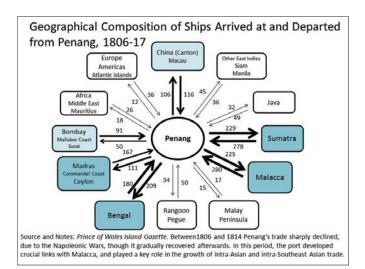
During the period from the end of the 18th century to the early 20th century, Southeast Asia as a region was integrated into the world economy with the gradual imposition of colonial rule by Western powers. At the same time, the region saw a sustained growth of intra-regional trade (intra-Southeast Asian trade) at an impressive rate even by the standards of other well-integrated regions. Succeeding the previous joint research (see below), this research aims to reinterpret the history of Southeast Asia's trade, by placing the growth of intra-regional trade, and the market institutions that supported it, at the centre of its dynamics. In so doing it hopes to offer a new perspective of Southeast Asian history, which emphasizes the continuity of the region's internal dynamics throughout the "long 19th century."

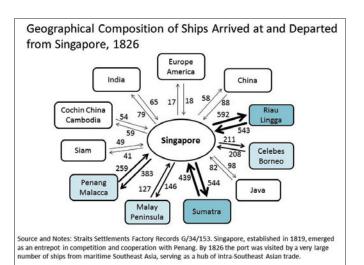
われわれは、萌芽研究「東南アジア史における交易網と中継港の役割」「平成22—23年度」において、19世紀の東南アジアにおける域内交易の成長という仮説を提出し、これまで研究が遅れていた19世紀前半の域内交易を数量的に検討した。その結果を19世紀末以降の趨勢と合わせて考えると、「長期の19世紀」における域内交易の持続的成長という構図が浮かび上がってくる。本研究は、植民地化やアジア間貿易の発展だけからは説明しきれない、シンガポール、香港などの中継港をハブとする東南アジア域内交易の持続的成長を支えた独自の市場制度の存在、および商業ネットワークの性格とその変化を貿易統計、商品価格データ、記述史料から解明し、その意義を論じる。域内交易史の立場からのこのような総合化の試みは存在しないので、東南アジアが他地域では見られない市場制度を発達させたことが解明できれば、現在研究の焦点となっている制度分析の比較史的研究に貢献できると考えられる。

平成24年度は、英文学術誌Southeast Asian Studies に本研究のこれまでの成果の特集を申請するとともに、2回の研究会を開催した。今年度も研究会形式での討論を継続するとともに、和文での個別研究の成果発表、関連研究会(石川基盤S、杉原基盤B、城山基盤Aなど)との交流を図る。さらに、国際的発信にも尽力し、最終的には、英文または和文での論文集の刊行を目指す。

In our previous research ('Trading Networks and the Role of the Entrepot in Southeast Asian History,' conducted from April 2010 to March 2012) we put forward a hypothesis that there was a growth of intra-Southeast Asian trade, and came up with a strong statistical evidence of its growth during the first half of the 19th century. By combining this finding with what we know from the relatively well-researched trade statistics of the late nineteenth century, this research examines the presence of an integrated set of market institutions (as well as merchant networks) centering around the entrepots of Singapore and Hong Kong, and its growth, with the use of trade statistics, price data and descriptive materials. It is hoped that our investigation into the market institutions of this region will offer a new agenda for the study of comparative institutional analysis.

In 2012 we submitted the proposal for a special issue to *Southeast Asian Studies*, which summarizes the result of our research so far and held two research meetings. This year we plan to hold research meetings in the same way, publish some of the results in Japanese, and mix with other research groups (such as Kaken grants headed by Ishikawa, Sugihara and Shiroyama) to exchange ideas and information to seek avenues for future research. We also endeavor to engage in the international dissemination of our research results, and eventually publish them in book form.







平成**24**年度 FY2012

都市・観光地における感染症の流行の情報発信方法に関する研究 ――インドネシアの都市と観光地における予防強化をめざして――

萌芽型

Study on a Transmission Method of Information to Disclose Outbreaks of and to Mitigate Infectious Diseases in Urban and Tourist Areas in Indonesia

吉川みな子(京都大学・学際融合教育研究推進センター), Rita Kusriastuti (世界保健機関南東アジア地域事務局・感染症部門), 西渕光昭(京都大学・東南アジア研究所), Agus Suwandono (インドネシア保健省・国立保健研究所、保健政策分析ユニット)

Yoshikawa Minako (Kyoto University, Center for Promotion of Interdisciplinary Education and Research), Rita Kusriastuti (WHO SEARO, Department of Communicable Diseases), Nishibuchi Mitsuaki (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Agus Suwandono (Ministry of Health, Indonesia, National Institute of Health Research and Development, Health Policy Analysis Unit)

■研究概要 Outline of Research

蚊媒介性感染症のデングウイルス感染症およびチクングニア熱が、東南アジアをはじめとする熱帯地域で猛威を奮い、グローバルに人々の生命と健康への脅威となるとともに社会的・経済的な負担となっている。本萌芽研究は、日本における2010年のデングウイルス輸入感染症の推定感染地の3割強を占めたインドネシア共和国に焦点をあて、観光地バリ島が直面していると考えられる迅速な感染症情報伝達の課題の克服に取り組む。

Mosquito-borne infectious diseases such as dengue virus infection and chikungunya fever have caused serious public health and socioeconomic burdens in tropical areas, including Southeast Asia. This research will focus on Indonesia where more than 30% of patients of imported dengue virus infection in Japan in 2010 visited, and aims to assist tourist areas in Bali to find a speedy method to disseminate information regarding infectious diseases outbreak and transmission.

本研究の目的は、迅速かつ適切な感染症情報の発信方法を提案し、 地域住民および渡航者の予防に関する知識普及の改善に寄与する ことである。グローバル化に伴い、これらの感染症の発生と伝播 および境域を越えての感染症の拡大に関与している渡航者の役割 が注目され始めている。越境する感染症の予防には渡航者への教 育・情報普及が欠かせないが、渡航者が出発国において得られる 感染症情報は、限定的となりがちである。本萌芽研究はこの公衆 衛生上重要な注意情報の不足という状況に一石を投じるべく、現 地調査にもとづき地域の事情を勘案した情報伝達方法を提示する。

近年、輸入感染症に起因したデングウイルス感染症およびチクングニア熱の国内事例が世界各地より報告されている。東南アジアが身近な渡航先である日本には媒介蚊が分布している。これら感染症の日本到来の遅延および、インドネシアにおけるより良い公衆衛生環境の整備を目指し日一イ両国の研究者らが本研究を遂行することは有意義である。熱帯性気候下の観光地にとり、蚊媒介性感染症の長期的な流行は、国際的な信頼性の低下につながるリスク要因である。結果として現地の社会や経済への悪影響が避けられなくなる可能性もある。流行地における渡航者への情報普及を図る本研究は、迅速かつ正確な情報伝達により予防対策の強化に寄与し、他の感染症対策への波及効果も期待できる。

The purpose of this research is to propose a speedy and appropriate communication method to disseminate outbreak information of mosquitoborne infectious diseases, and contribute to improving preventive knowledge of both local people and visitors. In this era of globalization, viraemic travelers often contribute to the spread of infectious diseases. To prevent infectious diseases from transmitting across countries/areas, educating and providing information to travelers is essential. Based on field investigation, this research will recommend locally suitable and prompt ways to alert both local people and visitors as well as draw their attention to outbreaks of mosquito-borne infectious diseases.

Recently, several countries have reported local outbreaks originating from imported infections. Southeast Asia is one of the most popular destinations for the people in Japan where vector mosquitoes are present. This collaborative research effort can be meaningful if it could contribute to delaying the imminent local outbreak of these mosquito-borne infections in Japan and improving the public health environment in Indonesia. Tropical tourist areas are threatened by mosquito-borne infectious diseases, and a prolonged endemic situation could undermine international confidence. As a result, local societies and economies could suffer negative effects. By establishing a system to provide rapid and accurate information of mosquito-borne infectious diseases in Indonesia, this research hopes to support efforts to prevent further infections. A well-established system could be potentially applied for other infectious diseases.



「デング熱予防のため、長袖・長ズボンを着用し、蚊にさされないようにしましょう」 というメッセージが効力をないことを思わせる、ガーデンツアーの際の外国人観光客の服装

This photo showing outfits of foreign tourists during a garden tour might indicate ineffectiveness of an educational public health message, "please wear clothes with long sleeves and lengthy trousers to avoid mosquito bites to protect yourselves from dengue virus infection."



熱帯気候化にあるバリでは、このように何気なく宿泊客により放置された容器に雨水が溜まると、 蚊にとっては理想的な産卵場所となり得る。

A hotel guest left this small container outside the guest room, perhaps without realizing that this could become a potential breeding place in a few days in a tropical area, such as Bali.



東南アジアにおける戦争の記憶と戦後和解をめぐる関係の再構築

War Memories in Southeast Asia and the Rebuilding of Relations over Post-war Reconciliation

松野明久(大阪大学・大学院国際公共政策研究科), 水野広祐(京都大学・東南アジア研究所), 内海愛子(大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター), 古沢希代子(東京女子大学・現代教養学部), 鈴木隆史(フリーランス研究者)

Matsuno Akihisa (Osaka University, Osaka School of International Public Policy), Mizuno Kosuke (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Utsumi Aiko (Osaka University of Economics and Law, Centre for Asia Pacific Partnership), Furusawa Kiyoko (Tokyo Woman's Christian University, School of Arts and Sciences), Suzuki Takashi (Freelance researcher)

研究概要 Outline of Research

東南アジア、とくにはインドネシアと東ティモールを取り上げて、両国と日本の第二次大戦をめぐる、また両国の先の紛争(1974~99年)をめぐる被害の「記憶」 すなわち主観的認識と、それが戦後和解においてもつ重要な役割及び位置付けを探求し、それを基礎に新たな和解のための関係構築のあり方を研究する。戦後和解においては「記憶」に向き合い、それをいかに癒やすかが大きな課題であることを、異なる2つの戦争体験の記憶をもとに一般的命題として論証する。

This research project studies memories of survivors in Indonesia and East Timor in past wars such as the World War II and the Indonesia-East Timor conflict, and explores the significance and the important role their "subjective" perspectives play in seeking post-war reconciliation. By doing this, the project seeks ways in which new relationships for reconciliation can be established. The research also aims to strengthen the argument, based on memories of two different types of war experience, that it is generally, facing up to "memories" and to heal the wounds therein in post-war reconciliation.

太平洋戦争期、またインドネシアと東ティモールの紛争については多くの研究が存在する。しかし、これらの戦争・紛争の被害の記憶は、一部収集され、公刊されているが、その分析方法や取り扱い方法、戦後和解における位置付けについて深く研究されてきたとはいえない。むしろ「記憶」は主観的領域の問題として実証研究の枠外に置かれてきた感がある。こうした背景に立って、本研究は「記憶」のもつ積極的な意義と役割を明らかにし、それが戦後和解のための諸政策、例えば「真実和解」といった手法などにおいて、どのように政策的に実行可能かを探求することで、戦後の関係再構築に資することを目的とする。

本研究は、被害・加害の証言収集を追加的に行うが、証言収集 そのものを目的とするのではなく、その意義の明確化、戦後和解 における役割の考察といった理論的探究を行うことが目的であり、 それによって学的な蓄積を具体的な社会的課題につなぎ、戦後和 解の実現に貢献することができる。

東アジアについての戦争被害の研究は蓄積があるが、東南アジアについては多くはない。本研究はこのギャップを埋めることに貢献する。次に、口頭証言が内包する記憶、感情、人生観・世界観・倫理観といった広がりをもつ認識的世界の包括性について、理論的意義を明らかにすることができる。そうした新しい観点から、これまでの諸政策を振り返り、あるべき政策・福祉のあり方を提示することができる。

There are various studies on the wartime periods both in Japan and Asia as well as the Indonesia-East Timor conflict. To varying degrees, memories of those wars have been collected and published. However, study has yet to deepen analytical frameworks, approaches, and moreover, their significance in post-war reconciliation. "Memories" have been rather placed outside the realm of positive studies that attach more importance to facts. Against this background, this project explores the significance and roles that "memories" can play and aims to see how they can be incorporated into post-war reconciliation policies such as truth commissions in order to establish new relations in post-war societies.

The team will conduct additional field research to collect the testimonies of survivors on both the victim and perpetrator's sides. However, the main purpose of the project does not lie in the gathering of testimonies itself. Rather, it is a research into the theoretical aspects of dealing with the meanings of testimonies and their contributions to post-war reconciliation. By doing so, the research aims to link its academic pursuit with societal challenges, especially with post-war reconciliation efforts.

Studies on war damage and victimization in East Asia are numerous, but the situation is not the same for Southeast Asia. This research project intends to fill this gap. Research can reveal the theoretical significance of the comprehensiveness of a cognitive world of oral narratives with memories, sentiments, worldviews, and ethics. Finally, the research will contribute to new directions on welfare policies and survivors.



日本軍部隊が駐留していた場所を住民とともに歩く。日本軍が作ったトーチカがいくつも存在する。 インドネシアのスラウェシ州にて。(撮影=鈴木隆史)

Walking with local people around the area where Japanese troops were stationed during war-time. Province of South Sulawesi, Indonesia. Photo by Takashi Suzuki.



日本軍が建設した空港の近くには地下壕が張り巡らされていた。 そこに食事を運んでいった母は性的暴力を受けていたと、住民は語る。インドネシア、南スラウェシ州。撮影=鈴木隆史。 Near the air strip the Japanese constructed, there remains a web of underground shelters. A local woman says that her mother experienced sexual violence when she brought food to Japanese soldiers there. Province of South Sulawesi. Photo by Takashi Suzuki.



萌芽型/JCAS

平成24年度 FY2012

教育・研究交流を通じた東アジアにおける産官学ネットワークの社会的影響の評価 ──東方政策の<mark>30</mark>年を振り返って──

Looking Back on 30 Years of the Look East Policy: Evaluation of the Social Impact of Industry, Government and Academia Networks in East Asia through the Exchange of Education and Research

金子芳樹(獨協大学・外国語学部), 穴沢 眞(小樽商科大学・商学部), 石川 登(京都大学・東南アジア研究所), 黒田景子(鹿児島大学・法文学部), 田村慶子(北九州市立大学・大学院社会システム研究科), 多和田裕司(公立大学法人大阪市立大学・大学院文学研究科), 富沢寿勇(静岡県立大学・国際関係学部), 好谷 鋭(立教大学・観光学部), 吉村真子(法政大学・社会学部), 山本博之(京都大学・地域研究統合情報センター), 川端隆史(東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所), 塩崎悠輝(同志社大学・神学部), 鈴木絢女(福岡女子大学・国際文理学部), 小野真由美(千葉大学・国際教育センター), Nasrudin Akhir (マラヤ大学・東アジア研究科), Alias bin Abdullah (マラヤ大学・東アジア研究科), Asmadi Hassan (マラヤ大学・東アジア研究科)

Kaneko Yoshiki (Dokkyo University, Faculty of Foreign Languages), Anazawa Makoto (Otaru University of Commerce, Department of Commerce), Ishikawa Noboru (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Kuroda Keiko (Kagoshima University, Faculty of Law, Economics & Humanities), Tamura Keiko (University of Kitakyushu, The Graduate School of Social System Studies), Tawada Hiroshi (Osaka City University, Graduate School of Literature and Human Sciences), Tomizawa Hisao (University of Shizuoka, Faculty of International Relations), Masutani Satoshi (Rikkyo University, College of Tourism), Yoshimura Mako (Hosei University, Faculty of Social Science), Yamamoto Hiroyuki (Kyoto University, Center for Integrated Area Studies), Kawabata Takashi (Tokyo University of Foreign Studies, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa), Shiozaki Yuuki (Doshisha University, School of Theology), Suzuki Ayame (Fukuoka Women's University, International College of Arts and Sciences), Ono Mayumi (Chiba University, Center for International Research and Education), Nasrudin Akhir (University of Malaya, Department of East Asian Studies), Asmadi Hassan (University of Malaya, Department of East Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

本研究では、留学や技術研修、研究者の派遣・招聘、国際学会の開催といった国際的な教育・研究交流が広域の産官学ネットワークの形成に与える影響を検討する。具体的には、1982 年に開始されたマレーシアの東方政策(ルックイースト政策)を取り上げ、日本・韓国の集団主義と勤労倫理を学ぶための留学生派遣事業が30年を経過して東アジアの産官学ネットワークにどのような影響を与えたかを評価する。実施に当たっては、日本外務省を通じてマレーシア政府の協力を仰ぎ、研究成果公表に際しては政策当局者への政策提言を行う。

The project will examine the impact of the transnational interchange of education and research such as studying abroad and receiving technical training, dispatching and inviting scholars, and the holding of international conferences towards a regional industry-government-academia network. The project takes the case of the Look East Policy, introduced in Malaysia in 1982 to learn about the work ethics and group mentality of Japan and Korea, and evaluate its impact on Malaysian society 30 years after its implementation. The project also intends to deliver recommendations to the Malaysian government to further enhancement policy from an academic standpoint through the Ministry of Foreign Affairs (MOFA) Japan.

マレーシアが 1982 年に開始した東方政策は、集団主義や勤労倫 理をはじめとする北東アジア社会の諸価値に学ぶことでマレーシ アの経済発展をめざすものであり、これまでに東方政策のもとで1 万3000人に上るマレーシア人が留学や産業技術研修のために日本 に派遣された。本研究では、30年にわたって国策として進められ てきた留学生派遣事業がマレーシアと日本、ひいては東南アジア を含む東アジア地域における産官学ネットワークにどのような影 響を及ぼしたかを検討する。30年を経てマレーシアは経済発展を 遂げ、「開発途上国が先進国に学ぶ」という東方政策の意義が変容 しつつあるが、マレーシア政府は今後も東方政策を継続する方針 である。本研究では、東方政策の意義が変質しつつあるこのよう な状況にも着目し、マレーシアにとっての東方政策の意義や、東 方政策の継続的な実施を可能にしたマレーシア社会の背景や国際 情勢についても考察する。東方政策の評価を通じて、国際的な教育・ 研究交流の促進が社会にどのような影響を及ぼすかについても検 討し、日本・マレーシアの政策担当者への政策的なインプリケー ションの発信もあわせて行う。

30年間にわたって実施され、国際的な教育・研究交流の促進事業として、(1) 留学先を特定国に限定している、(2) 勤労倫理のような社会規範や価値の体得を目標に掲げている、(3) 留学と産業技術研修を組み合わせているといった特徴をもつ東方政策を評価することで、国際的な教育・研究交流の促進が社会に与えるインパクトについて実証的に明らかにすることができる。また、本研究の実施自体がマレーシアと日本の教育・研究交流の促進につながるとともに、地域研究者による研究対象国への政策提言のあり方を検討することにもつながる。

・ RR (マレー人) シ (公用油・美 ミシの機 ・ フレー人の現在 ・ 1799 + 0ン)

マレーシア国立博物館の日本語ガイド研修でのマレーシア事情講義 Lecturing on Malaysia to Japanese guides at Malaysian National Museum

The following three conferences were held in Malaysia and Japan. (1) Symposium on "30th Anniversary of Look East Policy," organized by Centre for Foundation Studies in Science, University of Malaya, held in Malaysia on 23rd June 2012. (2) Panel on "Thirty Years of Malaysia's 'Look East' Policy: Review of the Policies and Recommendations" held at Kwansei Gakuin University on 14th October 2012 for the annual conference for Japan Association for Asian Studies (JAAS). (3) Conference on "Look East Policy: 30 Years and Beyond" held at Rikkyo University on 16th December 2012 for the annual conference of Japan Association for Malaysian Studies (JAMS). A director of MOFA Japan and an ex-student of the Look East Policy were invited to the December conference as panelists and discussed the evaluation and recommendation on the policy. The achievement and impact of the Look East Policy is evaluated not only from the standpoint of human resources development, but also from that of social and cultural aspects. The research outcome will be presented for further discussion at a conference to be held at University of Malaya in March 2013. The findings and recommendations will be published as a discussion paper and will be delivered to Malaysian government through MOFA Japan.



2013 年 5 月 5 日に行われたマレーシア総選挙ではボルネオ 2 州の投票が鍵を握った Voters in Bornean states had a significant role to play in the 13th general election of Malaysia in May 2013



萌芽型/JCAS

乳利用の有無からの牧畜論再考――旧・新大陸の対比―

Reconsidering the Pastoralism Concept from the Perspective of Milk Utilization —Its Comparison in the Old and New Continents—

平田昌弘(帯広畜産大学・畜産学部), 松林公蔵(京都大学・東南アジア研究所), 稲村哲也(放送大学・教養学部), 三宅 裕(筑波大学・人文社会系), 月原敏博(福井大学・教育地域科学部)

Hirata Masahiro (University of Agriculture and Veterinary Medicine, School of Agriculture), Matsubayashi Kozo (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Inamura Tetsuya (The Open University of Japan, Faculty of Liberal Arts), Miyake Yutaka (University of Tsukuba, Faculty of Humanities and Social Sciences), Tsukihara Toshihiro (University of Fukui, Faculty of Education and Regional Studies)

研究概要 Outline of Research

本研究は、牧畜の基盤を成すとされてきた乳文化に着目し、乳利用の視座から生業としての牧畜論を再考するものである。乳文化が牧畜の存立基盤をなす旧大陸乾燥地帯と乳文化が欠落する東南アジア・新大陸とで牧畜の構造について具体的に詳細に比較研究し、食糧獲得、群管理、育種・選抜、交易などの技法について多角的に検討する。また、旧・新大陸の牧畜比較と乳文化の視座をも加味した、新しい牧畜モデルを提起することを試みる。

Research into Old Continent dry areas milk cultures (such as milking, milk processing, and the uses of milk and milk products for living) has been essential for pastoralists. The lack of a milk culture for subsistence has, however, been reported in research conducted in the New Continent and Southeast Asia. Since many detailed case studies on pastoralist cultures have reported about pastoralism in these areas, the time is ripe to reconsider both theory and the definition of pastoralism from a wider perspective.

This research reconsiders the theory of pastoralism subsistence from the viewpoint of milk culture. In detail, it will look at those techniques important for pastoralists such as the procurement of food, flock management, selection and breeding of livestock, and broad trade. This will be done to present a structural comparison of pastoralism between the dry areas of the Old Continent where milk culture forms the base of pastoralist's subsistence, and the New Continent and Southeast Asia where milk culture is missing in local people's subsistence. Finally, this research will present a new model and definition of pastoralism.

研究の目的

1つの生業形態である牧畜についての議論で、「搾乳と去勢の発明により牧畜は成立した」との仮説が提出されている(梅棹、1976)。乳文化は、搾乳・食糧獲得に留まらず、群管理、育種・選抜、交易にも関わる牧畜の存立基盤をなす技術である。以後、牧畜は「家畜の群を管理し、その増殖を手伝い、その乳や肉を直接・間接に利用する生業」と定義され(福井、1987)、様々なモデルが提出されている。一方で、東南アジアやアンデスでは、乳利用が欠落して牧畜が成立していると報告されている(中尾、1972:稲村、1995)。牧畜についての具体的な研究が蓄積してきた現在、牧畜という生業をより広い視野で具体的に再考することが可能な状況となっている。

そこで本研究の目的は、旧大陸と新大陸とにおける牧畜について、

- (1) 生業構造の比較研究(牧畜の在り方、家畜所有の意義、移動性、 農耕民との関係、交易)
- (2) 生態人類学的比較研究(食糧依存内訳、食糧獲得戦略) を軸に、乳文化と常に関連させながら、牧畜という生業を再検討する。 その成果として、
- (3) 牧畜論・牧畜モデルの再考・提起を試みるものである。

研究の意義

これまでの牧畜論は、乳利用する旧大陸乾燥地帯の事例のみでもっぱら検討されてきた。乳文化が牧畜の存立基盤をなす旧大陸乾燥地帯と乳文化が欠落する旧大陸東南アジア・新大陸とで牧畜の構造を具体的に比較すること自体に、本研究課題の新しさと学際的奥深さとがある。そして、乳利用の有無の視座から検討するという新たな試みによって、牧畜における新しい重要な概念が整えられることに期待がかかる。更に、これまで数多く提出されてきた牧畜論を幅広くレビューし、牧畜論を改めてまとめあげることも本研究課題の意義である。

期待される成果

旧・新大陸の牧畜の構造を具体的に比較することにより、牧畜の存立 基盤をなすとされてきた乳文化について再考でき、生業の中で乳文化を 新たに位置づけし直すことができる。更に、乳利用の有無の視座から、 これまで気がつかなかった新たなる重要な諸相を発見することにもなり、 牧畜研究における学際的貢献度は大きい。これら一連の成果は、新しい 牧畜論・牧畜モデルの提起ともなる。

アラブ系牧畜民の搾乳。搾乳は、基本的に女・子供の仕事である。 1 人がヒツジ・ヤギを固定し、 1 人が家畜の後脚の間から両手で搾乳する。

Milking by a Baqqara group, Arab pastoralists in North-east Syria. The milking is basically the task of women and children. One holds sheep and goats tightly, another conducts milking with two-hands from between the back legs. The milk culture, milking, milk processing and uses of milk products, forms the base of pastoralist's subsistence.

Purpose of the research

The purpose of this research is to reconsider the subsistence theory of pastoralism, keeping milk culture in mind, through a comparative analysis of pastoralism in both the dry areas of the Old Continent, the New Continent and Southeast Asia. The main topics for discussion are as follows: 1) the subsistence of pastoralists such as their structure, management of livestock keeping, mobility, relationships with farmers and trade, and 2) Ecological-anthropological studies such us a detailed breakdown of food intake and strategies of food procurement. This research will also try to set up a new model and definition of pastoralism.

Significance of the research

Theories of pastoralism have been discussed mainly through case studies based on the dry areas of the Old Continent where milk products were, and continue to be used as essential materials for subsistence. Since a comparative analysis of pastoralism between the dry areas of the Old Continent, and the New Continent and Southeast Asia will be a first in the history of pastoralism studies, this research should be considered original and interdisciplinary. Through developing a comparative discussion from the perspective of milk cultures this research expects to create a new and significant concept relevant to pastoralism studies. Furthermore, this research also expects to present a significant review of the history of pastoralism studies.

Expected results

It has been said that milk cultures function as a basic aspect of pastoralist's subsistence. Through a comparison of pastoralism structures in both the Old Continent and the New Continent, we can reconsider milk culture through this research. Since a discussion from the unique perspective of milk culture can allow us to discover new aspects in a theory of pastoralism, this research hopes to greatly contribute to the field. These results will offer a new concept and model of pastoralism.



乳製品に依存した食事。酸乳のハーセル、バターのジブデ、バターオイルのサムネ、砂糖、そして、発酵平焼きパンのホブス。乳製品が中心となり食事を成り立たせている。

Dietary intake which depends largely on milk and milk products, in a Baqqara group, Arab pastoralist, North-east Syria. There are fermented milk "khaather", butter "zibde," butter-oil "samneh," sugar and naan "khobz" on the plate. The dietary intake in the Baqqara consists of milk and milk products mainly, rather than meats.

東南アジアと日本を架橋する――IPCRフェローシップ制度

Creating New Bridges between Southeast Asia and Japan—IPCR Fellowship Program

柴山 守 (京都大学地域研究統合情報センター・特任教授)

Shibayama Mamoru (Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)

IPCRによる課題─タイプII「外国人客員制度を活用した拠点集中型研究」
─で採択された、「東西文化回廊研究 ─ミャンマーからタイ・カンボジアを中心に─」(2012~2013年)の研究プロジェクトの招聘で、ロンドン大学 SOAS のエリザベス・ホワード・ムーア教授が 2013年3月末から9月末まで来日された。その来日が決まって以降、筆者のもとにいくつかの講演依頼が届いた。 勿論、ムーア教授に対してである。上智大学元学長の石澤良昭教授をはじめ、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、同奈良文化財研究所、アジア歴史地理情報学会などであった。

ムーア教授はまず、5月に上智大学で開催された国際シンポジウム「東南アジア歴史街道を行く」で「ミャンマー考古学と東西回廊」というテーマで講演された。タイからの研究者2名も加わり、同時通訳も準備されたシンポジウムは、多くの学者・文化人、市民や報道関係者など100名を超える参加者を得て、大盛会であった。東京では、このシンポジウムを皮切りに、アジア歴史地理情報学会での講演や東京文化財研究所、在日ミャンマー連邦大使館における研究と学術交流の打合せが続いた。

一方、関西では、ムーア教授は奈良文化財研究所での研究会に2回招聘され、NHK 取材班との打合せにも出席、9月中旬には京都大学 100 周年時計台記念館での「東西回廊」プロジェクトの記者発表にも参加された。

招聘期間中のムーア教授の活躍は、日本国内だけではなかった。6月にプノンペンで開催された国連教育科学文化機関(ユネスコ)の第37回世界遺産委員会に、ミャンマー政府代表の一員として出席され、富士山の世界遺産への登録の審議に参加された。その直前には、タイ・チョンブリで開催された第1回東南アジア考古学国際会議で「東西回廊」パネルを設け、本プロジェクトの共同研究が東南アジアの考古学者に紹介されたのである。その後も、ムーア教授は、指導するヤンゴン大学での研究者への講義、学生を引率してのバゴー(ペグ一)へのフィールド調査とハードなスケジュールを続けた。

「東西回廊」説は、元東南アジア研究センター所長であった故石井米雄名 誉教授が、2009 年の東南アジア学会ではじめて提唱したものである。その説 は、今年、新たな知見の交換やミャンマー・タイ国境における踏査に関する共 同研究を実施し、文字通り、日本の'東'と'西'をつなぐ「回廊」を駆け巡っ たのである。そして、本プロジェクトに参加するタイ、カンボジア、ラオス、ベトナムの考古学、人類学、情報学者達と日本の研究者を架橋することとなった。

東南アジア研究所の IPCR フェローシップ制度は、所外の研究者が提案したプロジェクトによって外国人研究員が招聘されるシステムで、研究所がもつ本来の客員招聘制度とは性格が異なる。 国際的な協働・連携の推進に重要な役割を果たし、その意義は極めて大きい。 本制度が今後とも発展し、日本と東南アジアのさらなる大きな架け橋になることを願っている。



バゴーにおける臨地調査一行 Field Survey in Bago, Myanmar

Prof. Elizabeth Howard Moore of the School of Oriental and African Studies (SOAS), University of London, stayed at the Center for Southeast Asian Studies (CSEAS) as a visiting fellow from March to September, 2013 on the IPCR program II-2 "Study on East-West Cultural Corridor—From Myanmar to Thailand and Cambodia (EWCC)" project. After deciding to come to Japan, she was invited to give lectures. Of course, these were all requests from persons such as the former president of Sophia University, Prof. Yoshiaki ISHIZAWA, and organizations such as the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo (Tobunken), the Nara National Research Institute for Cultural Properties (Nabunken) and the Asian Network for GIS-based Historical Studies (ANGIS), Japan.

In May 2013, Prof. Moore gave a lecture on "Myanmar Archaeology and the East-West Cultural Corridor" in a symposium on "Exploring Historical Corridor in Asia – From Myanmar to Thailand and Cambodia" at Sophia University. The symposium offered simultaneous interpreting and was attended by two Thai scholars as well as many other academics, members of the public and reporters. Through this academic event, a series of exchange meetings between Myanmar and Japan took place between ANGIS, Tobunken and the embassy of Myanmar in Tokyo. Prof. Moore was twice invited to attend workshops and meetings on Myanmar archaeology and the EWCC in Nabunken, was interviewed by NHK and participated in a press conference at EWCC held at the Clock Tower, Kyoto University.

Prof. Moore also attended the 37th world heritage committee meeting, UNESCO, held in Phnom Penh, Cambodia in June 2013, where she was the member of a Myanmar delegation which discussed the approval of Mount Fuji for world heritage status. Before that, she organized a EWCC panel in the 1st SEAMEO SPAFA International Conference on Southeast Asian Archaeology. The EWCC project sponsored by the IPCR program was enthusiastically introduced to participants. Prof. Moore's activities were followed by special lectures in the University of Yangon and a field survey in Bago city, Myanmar with students and teachers.

The theory of the "East-West Corridor" was first proposed by Professor Emeritus, Kyoto University Yoneo ISHII (1929-2010) - a former director of CSEAS - at the Japan Society for Southeast Asian Studies (JSSEAS) in 2009. New ideas and research plans on the EWCC project including Prof. ISHII's theory ran throughout the "corridor" between Tokyo and Kansai areas. It also created new bridges between both scholars of Southeast Asia and Japan.

The IPCR fellowship program offers a remarkable system for international exchange open to scholars both inside and outside of Japan. It offers chances for people from the academic world to propose new collaborative projects with CSEAS staff. And, it continues to play an important role in fostering international collaborative research between Southeast Asian and Japanese scholars. We hope that relationships for both will be strengthened through this program.



文化省ウータンスウェー副大臣に WHC 航空写真を紹介、バゴー遺蹟事務所にて Introducing WHC aerial photograph to Deputy Minister of Ministry of Culture H.E. U Than Swe, In Bago Archaeological Office



生存基盤指数の再検討――持続型生存基盤パラダイムの国際的発信に向けて-

Towards the Further Development of the Humanosphere Potentiality Index (HPI)

Sato Shiro (Osaka International University, Faculty of International Communication), Sato Takahiro (International Rice Research Institute, Crop and Environmental Science Division), Nishi Makoto (Kyoto University, Center for Promotion of Interdisciplinary Education and Research), Watanabe Kazuo (Research Institute for Humanity and Nature, Research Department), Sugihara Kaoru (National Graduate Institute for Policy Studies, Graduate School of Policy Studies), Mine Youichi (Doshisha University, Graduate School of Global Studies), Kono Yasuyuki (Kyoto University. Center for Southeast Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

本研究メンバーは、G-COEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」のメンバーとして新たな指数の開発に取り組み、その研究成果は『生存基盤指数――人間開発指数を超えて』(2012年3月、京都大学学術出版会)として刊行された。同書の主張に対しては、すでに国内外の研究者から様々な反響が寄せられている。本研究では、生存基盤指数の有用性を再検討するとともに、同書の英語書籍の刊行や国際誌への論文投稿を通じて指数の国際展開を図る。

This research re-examines previous development indexes developed on a former G-COE program, and proposes a new development index named the 'Humanosphere Potentiality Index' (HPI). This is a research outcome of the former program "In Search of Humanosphere in Asia and Africa" (CSEAS, Kyoto University). Numerous criticisms have been made by scholars so far and this research attempts to analyse them, respond to them and re-construct the HPI.

本研究の目的

本研究は、生存基盤指数に対する批評を熟考しつつ、生存基盤 指数の構成要素を再検討するとともに、他の開発指標とのさらな る比較を試みるものである。この作業を通じて、持続型生存基盤 パラダイムおよび生存基盤指数の国際的な浸透を図る。

本研究の意義

生存基盤指数は、文理融合をベースとする地域研究の視点から 持続可能な社会の在り方をあらためて問うものである。したがっ て本研究は、これまでの開発パラダイムに関するアンチテーゼを 広く世に問うことにほかならない。ここに、本研究の意義を見出 せる。

本研究の期待される成果

本研究は、英語書籍の刊行ならびに国際研究雑誌への論文投稿という形で、その成果を発信する予定である。また、International Convention of Asian Scholars (ICAS) などにおいて研究発表を行う。なお、オランダ・ライデン大学国際研究所 (IIAS) のニュースレターへの記事投稿も予定している。

Purpose

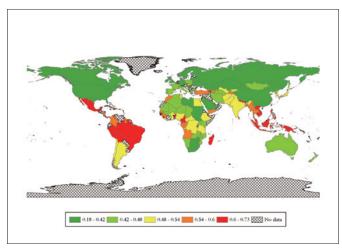
The aim of this research is to further develop the HPI. We attempt to re-examine each components of the HPI, and compare our HPI with other development indexes.

Significance

The HPI re-considers an interdisciplinary sustainable society from the viewpoint of area studies. By doing so, we attempt to provide a new paradigm on development.

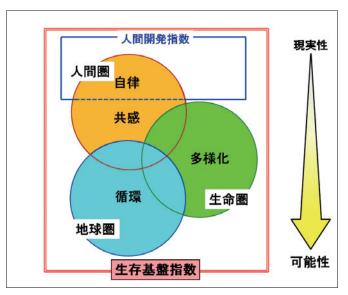
Expected Results

We expect to publish a book in English as well as an article in an international journal. In addition, we have a plan to write a short essay in the Focus Section of the newsletter for International Institute for Asian Studies (IIAS), Leiden University after a presentation at the International Conference of Asian Scholars (ICAS).



生存基盤指数からみた世界

The world from the viewpoint of the Humanosphere Potentiality Index



生存基盤指数の射程

The analytic scope of the Humanosphere Potentiality Index



民主化における司法の役割――タイとインドネシアの比較-

萌芽型

The Role of the Judiciary in Democratization: Comparison of Thailand and Indonesia

外山文子(京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科), **玉田芳史**(京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科), **岡本正明**(京都大学・東南アジア研究所), **永井史男** (公立大学法人大阪市立大学・大学院法学研究科), **相沢伸広**(独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所), **見市 建**(公立大学法人岩手県立大学・総合政策学部)

Toyama Ayako (Kyoto University, Graduate School of Asian and African Area Studies), Tamada Yoshifumi (Kyoto University, Graduate School of Asian and African Area Studies), Okamoto Masaaki (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Nagai Fumio (Osaka City University, Graduate School of Law), Aizawa Nobuhiro (Institute of Developing Economies Japan External Trade Organization), Miichi Ken (Iwate Prefectural University, Faculty of Policy Studies)

▋研究概要 Outline of Research

ことを目的とする。

現在、世界的に民主化における司法の役割に対して注目が集まっている。東南アジアにおいても例外ではない。特に、タイにおいては憲法裁判所が与党を解党するなど、政治的に大きな影響力を持つようになった。しかし、一部のタイ国民の間からは、憲法裁判所の判決に対して強い反発が生まれている。反対に、インドネシアでは民主化において憲法裁判所が果たした役割に対し、積極的な評価がなされている。本研究会では、タイとインドネシアの憲法裁判所の制度設計や政治的背景について比較検討し、民主化における司法の役割について新たな視座を提示する。

冷戦終結後、世界的に政治の民主化が進む中で、民主主義の「質」 が問われるようになった。民主主義の「質」を保証するために、 特に新興民主主義国において、司法の政治的な役割が期待される ようになった。東南アジアの状況を概観すると、タイとインドネ シアが民主化に関して好対照な軌跡を辿っていることがわかる。 タイは、1990年代には、タイ史上最も民主的といわれている 1997 年憲法が誕生したことにより、民主化の定着期に入ったと見なさ れていた。しかし2006年に再び軍事クーデタが起こり、その後に 憲法裁判所が与党を2度解党したことにより政治は不安定となっ た。反対にインドネシアは長く権威主義体制であったが、1998年 にスハルト体制が崩壊した後、民主化が進展した。現在インドネ シアは、ASEAN における民主化の優等生となっている。インド ネシアでは、憲法裁判所が中立的な判決を下し、選挙政治の定着 を助けたと評される。何故このような違いが生じたのか、両国の 憲法裁判所の制度設計の相違点を検証することにより、民主化に おける司法の政治的役割や問題点について新たな視座を提供する

本研究を通して期待される成果は、両国における(1)憲法裁判所設立の政治的背景、(2)憲法裁判所の制度的独立性と判決の政治性との関係、(3)政治アクターと司法関係者との関係などについての解明である。更に、両国の間の相違点の分析から、民主化における司法の役割や問題点について深く理解するための基盤を構築する。

近年は、新興民主主義国諸国において司法の役割が注目を集めるようになってきたが、学術的な研究は依然として乏しい状況である。よって本研究は、東南アジアに限らず、民主化研究全体に対して大いに貢献することができると予想される。

ของพรงพระเจริญฝิ่งฝืนนาน ด้วยเกล้าด้วยกระหม่อม ขอเคชะ ข้าพระพุทธเจ้า ศาลรัฐธรรมนูญ และสำนักงานศาลรัฐธรรมนูญ ร่วมลงนานควายพระพร

王妃の誕生日を称えるタイ憲法裁判所 Constitutional Court of Thailand honors the Queen's birthday

Currently, many scholars pay attention to the role of the judiciary in democratization in Southeast Asia. For example, the Constitutional Court of Thailand began to gain major political influence after dismantling the two ruling parties. However, strong opposition to the Constitutional Court occurred after these judgments. On the other hand, in Indonesia, the Constitutional Court has been appreciated for its active role in democratization. Why are there such differences between these two countries? The purpose of our research is to compare the political backgrounds and institutional designs of the Constitutional Courts of the two countries in order to resolve this question.

In order to guarantee the "quality" of emerging democracies, judiciaries are expected to play an important political role. When reviewing the situation in Southeast Asia, Thailand and Indonesia present a marked contrast in respect to democratization. In the 1990s, Thailand's democratization went through a consolidation period in a short period of time. However, Thai politics has become unstable due to the judicial decisions of the Constitutional Court that have dismantled the ruling parties on two occasions. On the other hand, Indonesia has been ruled by authoritarian regimes for a long time, but after the Suharto regime collapsed in 1998, its democracy rapidly progressed. At present, Indonesia has become an ideal model of democratization in ASEAN. In Indonesia, the Constitutional Court is often seen to rule neutrally and promote the consolidation of electoral politics. After focusing on the differences of institutional designs of the Constitutional Court of the two countries, we will clarify the problems in the political role of judiciary in democracy.

Recently, the role of the judiciary drew the attention in emerging democracies, but it is poorly studied academically. Therefore, this comparative study of the political roles of the judiciary between Indonesia and Thailand is also expected to contribute greatly to the democratization study in other regions.



インドネシア憲法裁判所 Constitutional Court of Indonesia



東南アジア地域資料の長期的収集・利用に関する研究

Collaborative Research for the Long-term Acquisition and Practical Use of Resources on Southeast Asia

矢野正隆(東京大学・大学院経済学研究科),石井美千子(日本貿易振興機構アジア経済研究所・図書館),大野美紀子(京都大学・東南アジア研究所),加藤さつき(東京 外国語大学・学術情報課),木谷公哉(京都大学・東南アジア研究所),北村由美(京都大学・附属図書館研究開発室),高橋宗生(日本貿易振興機構アジア経済研究所・図 書館),多田剛志(大阪大学・附属図書館箕面地区図書館サービス課外国学図書館班)

Yano Masataka (The University of Tokyo, Graduate School of Economics), Ishii Michiko (Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization, Library), Oono Mikiko (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Kato Satsuki (Tokyo University of Foreign Studies, Library), Kitani Kimiya (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Kitamura Yumi (Kyoto University Library, Research and Development Laboratory), Takahashi Muneo (Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization, Library), Tada Tsuyoshi (Osaka University, Minoh Campus Library Services Division)

▋研究概要 Outline of Research

本研究グループでは、東南アジア諸地域を対象として、関係する逐次刊行物の日本国内機関における所蔵状況や、現地での出版の現状について、各方面から調査を行ってきた。これまでの研究成果は、『東南アジア研究逐次刊行物総合目録』『東南アジア逐次刊行物の現在――収集・活用のためのガイドブック』として公表されている。本研究では、これまでの作業を通じて明らかになったデータの不備を改善し、さらに有用なデータとして整備することを基本とする。また、オンライン情報の調査をおこない、旧来の紙媒体主体の情報に付加する。これを通じて、東南アジア地域に関する情報を長期的に収集・蓄積していくための基盤を作る。

The aim of this project is to develop a more effective and systematic infrastracture to facilitate the collection and development on Southeast Asian studies related resources by enriching the outcome of our previous projects such as "Periodical Publications in Contemporary Southeast Asia" and Southeast Asian Periodicals Database [http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/info/db/sealib/?lang=en].

In this collaborative research, we will first update the data set and conduct further research on the current condition of online resources. This aims to strengthen the infrastructure to accumulate the information on Southeast Asia, in both paper and digital media.

本研究は、東南アジア地域情報の収集・蓄積をより確実にし、 その長期的な利用を保障するための土台作りを目的とする。具体 的には、以下の2つの作業をおこなう。

(1) 収集すべき資料に関する情報の正確な把握

本研究グループは、これまでにコアジャーナルや官報といった 逐次刊行物のデータベース(東南アジア逐次刊行物総合目録デー タベース)を作成し公開しているが、ここに掲げられた書誌等の 情報は必ずしも完備されているとは言えず、中には刊行状況の不 明なタイトルも存在する。そこで、まず、これを精査してデータベー スに反映させ、より正確な情報を提示できるようにする。この改 訂により、本データベースは、調査・研究だけでなく、資料の収 集や整理の現場においても、より有用なツールとなることが見込 まれる。

(2) 東南アジア情報のオンライン化に関する実態把握

近年では、東南アジアにおいても情報のデジタル化・オンライン化が進展しており、また、東南アジア以外の地域における東南アジア情報のデジタル化も進みつつある。そこで、(1)の逐次刊行物を中心に、現地及びその他の地域における東南アジア情報のデジタル化・オンライン化の動向について基礎的な調査を行う。これは、図書館等が情報収集の戦略を策定する際に、まず押さえておくべきポイントであり、今後、複数館による資料の共同収集・共同利用を効率的に進めるためにも、不可欠のデータとなるであろう。

Federal Court dismisses Lina Joy's appeal Court dismisses Lina Joy's appea

東南アジアの新聞 Newspapers in Southeast Asia

There are 2 main tasks in this collaborative research.

 To obtain and share accurate information on resources essential for Southeast Asian studies.

We will closely examine and enrich the online database "Southeast Asian Periodicals Database," which consists of bibliographic and holding information of core journals, newspapers, and gazettes in Southeast Asia.

To obtain current information on how regional information is digitized and publicly accessible on web space in Southeast Asia.

Recently, resources about Southeast Asia have been digitized in non-Southeast Asian countries as well as home countries, however the condition varies depending on the country or the subject. It is essential for us to conduct a basic research on the trend of digitization for each country on various subjects.

Through these tasks, we will create a more reliable basis for long-term use of these resources in addition to obtaining basic information for collaborative acquisition of these resources among libraries in Japan.



東南アジア逐次刊行物の現在 Periodical publications in Contemporary Southeast Asia



内陸部東南アジアの「被戦争社会」の変容とレジリエンス

Transition and Resilience of 'War Affected Societies' in Inland Southeast Asia

瀬戸裕之(京都大学・東南アジア研究所),**河野泰之**(京都大学・東南アジア研究所),**岩井美佐紀**(神田外語大学・外国語学部アジア言語学科),**今村真央**(シンガポール 国立大学・地理学部),**西本 太**(総合地球環境学研究所),**倉島孝行**(森林総合研究所・森林管理研究領域),Bounthong Bouahom(ラオス国立農林業研究所), Linkham Douangsavanh(ラオス国立農林業研究所)

Seto Hiroyuki (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Kouno Yasuyuki (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Iwai Misaki (Kanda University of International Studies, Faculty of Foreign Languages, Department of Asian languages), Imamura Masao (National University of Singapore, Department of Geograpy), Nishimoto Futoshi (Research Institute for Humanity and Nature), Kurashima Takayuki (Forestry and Forest Products Research Institute, Department of Forest Management), Bounthong Bouahom (National Agriculture and Forestry Research Institute, Lao PDR), Linkham Douangsavanh (National Agriculture and Forestry Research Institute, Lao PDR)

研究概要 Outline of Research

本研究は、内陸部東南アジアを戦争、特にインドシナ戦争とヴェトナム戦争によって被害を受けた「被戦争社会」として捉え、戦争が地域の社会形成と環境の変化に与えた影響を考察することによって、東南アジアの社会形成を再考する。さらに、戦争被害によるリスクに対して人々がどのように対応し、新たなネットワークと生業を形成したかを考察することによって、地域住民の耐久能力(レジリエンス)を明らかにする。

This research intends to reconsider the formation of Southeast Asian societies by regarding inland Southeast Asia as a "war affected society" where livelihood and environment were damaged and transformed by the Indochina and Vietnam wars. In addition, this research explains the resilience of local people by studying the ways they overcame the risks and difficulties caused by war, and also focuses on the new networks and livelihoods they developed post war.

本研究の目的は、内陸部東南アジアの社会形成について、戦争の影響と住民の耐久能力(レジリエンス)という視点から再考することである。

研究意義は、第1に、内陸部東南アジアの社会形成の特徴を、戦争の影響という視点から再考することである。従来、内陸部東南アジアの社会変化は、自然経済から商品経済への移行過程として捉えられることが多かった。しかし、1960年代、1970年代に行われた近代戦争(インドシナ戦争、ヴェトナム戦争)は、山地部に居住する住民の移住を引き起こし、移住先での生業と自然環境に変化を与えた。さらに、海外に亡命した家族とのネットワークが、紛争後に新たな生業を生み出しつつあり、戦争が東南アジアの社会変化に与えた影響は大きいと考える。

第2に、戦争によって移住した住民たちの生業変化を考察することで、現在の災害・移住によって生じるリスクに対する住民の耐久能力と条件を明らかにすることである。戦争によって村を離れた住民たちは、新しい環境の中で、政府からの支援、土地の開墾、林産物の利用、周辺の村との協力、親族のネットワークにより生存を維持しようと努めた。その経験から、天災、開発によって移住せざるを得ない住民たちに対する対応(ケアー)について明らかにできる。

本研究で期待される成果は、「被戦争社会」の経験から内陸部東 南アジアの固有性を明らかにし、さらに災害・移住によるリスク への対応について提言することである。 The purpose of this research is to reconsider the formation of inland Southeast Asia from the viewpoint of the influence of wars and the resilience of the local people.

Firstly this research reconsiders the features of the formation of inland Southeast Asian from the viewpoint of the influence of war. Previous studies of the region have focused on transition from a natural to market economy. Recent modern wars (the Indochina war and the Vietnam war) in 1960s and 1970s, however, led to the resettlement of people living in mountainous areas, and transformed their livelihoods and their environments. Moreover, the networks made of families who had exiled members in foreign countries created new forms of livelihood for local people. Thus, it seems that the wars have heavily affected the social change of Southeast Asia.

Secondly, this research analyzes the resilience of the people against risks and disasters, and the conditions of their success through an investigation into the livelihood changes of the peoples who resettled during the war. After leaving their home villages, many struggled for survival in new places, particularly in getting assistance from governments, reclaiming new lands collecting non-timber forestry products, cooperating with neighboring villages, and using family networks. Their experiences will teach us lessons on how to develop care for people who are resettled by developemnt projects and natural disasters.

The expected results of this research will highlight the specific characteristics of inland Southeast Asia, as well as offer suggestions to develop care for the persons who are affected by risks that arise from disasters and resettlements.



2012 年 11 月の予備調査団メンバーとラオス国立農林業研究所長のブントーン氏 Members of preliminary survey in Nov. 2012 and Dr. Bounthog, Director General of National Agriculture and Forestry Research Institute, Lao PDR.



ラオスの内戦期に移住させられた HP 村 HP village which was resettled during the civil war of Laos



21世紀のタイ文化史——共同研究に向けた基盤形成-

Thai Cultural History in the 21st Century: A Preliminary Study

坂川直也 (京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科),加納 寛 (愛知大学・国際コミュニケーション学部),山田 均 (名桜大学・国際学群),矢野秀武 (駒澤大学・総合教育研究部),岩城考信 (呉工業高等専門学校・建築学科),田代亜紀子 (奈良文化財研究所・企画調整部),平田晶子 (東京外国語大学・大学院地域文化研究科),日向伸介 (京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科),小林 知 (京都大学・東南アジア研究所)

Sakagawa Naoya (Kyoto University, Graduate School of Asian and African Area Studies), Kano Hiroshi (Aichi University, Faculty of International Communication), Yamada Hitoshi (Meio University, Faculty of International Studies), Yano Hidetake (Komazawa University, Faculty of Arts and Science), Iwaki Yasunobu (Kure National Collage of Technology, Department of Architecture), Tashiro Akiko (Nara National Research Institute for Cultural Properties, International Cooperation Section, Department of Coordination and Planning), Hirata Akiko (Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Arts and Culture Studies), Hinata Shinsuke (Kyoto University, Graduate School of Asian and African Area Studies), Kobayashi Satoru (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

本研究は、タイ文化史の学説史的な検討、および 21 世紀のタイ社会における文化史研究の意義の検討を通して、将来的な共同研究に向けた共同研究課題の設定を目指す。タイ文化史という開かれた枠組みのもとで、多様な領域に携わる研究者が集まり議論を行うことにより、広範かつ有意義なネットワーク形成が期待される。

The purpose of this preliminary research is to set an agenda for a future collaborative project by discussing the possible role of cultural history in 21st century Thai society. As researchers from various fields participate, it can be expected that broad and beneficial networks will be formed.

本研究の目的は、今日のタイ社会において文化史研究がどのような意義をもちうるのか、その可能性を検討し、将来的な共同研究に向けた課題設定をおこなうことである。

2006年のクーデタ以降、タイでは王制と民主制をめぐる対立が国民間に生じている。その対立はさらに、世界遺産であるプレア・ヴィヒア/プラ・ウィハーン遺跡の帰属をめぐるナショナリズム感情の高揚にも関係している。現代の王制やナショナリズムに関わるこれらの問題においても、文化的・歴史的なアプローチが不可欠であることは、たとえばチャーンウィット・カセートシリ氏の近年の活動からも明らかであろう。

本研究会は、タイ文化史という開かれた枠組みのもとで、多様な領域(政治史・思想史・文化史・建築史・映画史・宗教学・仏教学・考古学・人類学)に携わる研究者が集まり議論をおこなう。同時に、それが「タイ」研究というナショナルな空間に閉じられることを避けるために、カンボジア、ベトナム研究の専門家にも参加を求めた。

専門を異にしながらも広義の文化史に携わる研究者が集まり、 共同で問題提起を行う場となる本研究会は、地域研究の拠点形成 において重要な意義をもつものである。 This research is an attempt to set an agenda for a future collaborative project by discussing the possible role of cultural history in Thai society today.

One example of this is that since the military coup in 2006, frequent conflicts over democracy and monarchy have broken out in Thailand. They are also related to growing nationalism in the disputed areas around the Preah Vihear / Khao Phra Viharn Ruins that were registered on the World Heritage List in 2008. The active role of Dr. Charnvit Kasetsiri demonstrates the significance that cultural and historical approaches can have and how they can be used to gain a better understanding of present political issues.

To examine the social meaning of Thai cultural history, this research will provide a rare opportunity for researchers from various fields (i.e. political history, intellectual history, cultural history, architectural history, film history, Buddhist studies, archaeology and anthropology), to exchange information and opinions. This kind of attempt has seldom been done in Thai studies in Japan, and will also contribute to formulate a center for Southeast Asian Studies.



ダムロン親王視察中のプレア・ヴィヒア/プラ・ウィハーン遺跡(1930)(タイ国立公文書館所蔵) Preah Vihear / Khao Phra Viharn Ruins during the Prince Damrong's visit in 1930 (preserved in National Archives of Thailand)



「文明」的な服飾を指導するピブーン政権期のポスター (1941) (タイ国立公文書館所蔵) Phibun Regime's poster showing "civilized" clothing (1941) (preserved in National Archives of Thailand)



文理融合のメタ研究にむけで――持続型生存基盤研究における経験から-

Toward a Meta Study of Inter-disciplinarity in Natural and Social Sciences: Experiences from the Sustainable Humanosphere Project

生方史数(岡山大学・大学院環境生命科学研究科), 木村周平(筑波大学・人文社会系), 渡辺一生(総合地球環境学研究所・研究部), 佐藤史郎(大阪国際大学・国際コミュニケーション学部), 河野泰之(京都大学・東南アジア研究所), 佐藤孝宏(国際稲研究所・作物環境科学部門), Lambino, John XXV Paragas (京都大学・大学院経済学研究科)

Ubukata Fumikazu (Okayama University, Grad. Sch. of Environmental and Life Science), Kimura Shuuhei (Tsukuba University, Fac. of Humanities and Social Sciences), Watanabe Kazuo (Research Institute for Humanity and Nature, Research Department), Sato Shiro (Osaka International University, Faculty of International Communication), Kono Yasuyuki (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Sato Takahiro (International Rice Research Institute, Crop and Environmental Science Division), Lambino, John XXV Paragas (Kyoto University, Graduate School of Economics)

研究概要 Outline of Research

本研究では、京都大学東南アジア研究所を主幹として 2007 年より 5 年間 実施された G-COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」を事例に、文理融合型のプロジェクトが立案から終了に至るプロセスの中で必然 的あるいは偶発的に抱える課題を明らかにする。また、そうした課題がどう乗りこえられうるのか、研究者の連携に必要な要件を考察し、文理融合研究や地域研究も含めた学際研究プロジェクトの比較研究をするための研究手法も検討する。

This research examines how researchers confront, struggle and overcome difficulties during the process of interdisciplinary research projects which aim at collaboration between the natural and social sciences. As a case study, we chose our experience of the Global-COE program "In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa" which was ran between 2007-2012. Through project documentation and interviews, we will try to analyze what happened during the formation of "integrated knowledge" in the project. This is a meta study attempt which seeks for possibilities and conditions of inter-disciplinary research collaborations, as well as explores methodologies which can compare different interdisciplinary research projects.

昨今、文理融合や異分野融合を銘打った共同研究プロジェクト が乱立しているが、そこで実際にどのような交流や融合が行われ たのかは学術的にほとんど検証されていない。本研究では、京都 大学東南アジア研究所を主幹として 2007 年より 5 年間実施された G-COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」 において中核的な役割を果たした研究者たちが、プロジェクト・ ドキュメンテーションなどの手法を用い、プロジェクトにおける 「融合知」の生成過程を検証する。ここでは、プロジェクトの組織 や方法に加えて、関連する社会政治的・科学的なフレーミングや 参加者の保持している「文化」が、その後の「融合知」の生成過 程に影響を与えるという状況を想定している。これらの検証により、 文理融合型の研究プロジェクトが、立案から終了に至る一連のプ ロセスの中で抱える課題を明らかにすると同時に、そうした課題 がどう乗りこえられうるのか、研究者の連携に必要な要件を考察し、 文理融合研究や地域研究も含めた学際研究プロジェクトの比較研 究をするための研究手法も検討する。

本研究によって、以下 2 点の成果が期待できる。

- (1) 文理融合研究を可能にする要因にはどのようなものがあるか、逆に「成功」を阻む要因は何か、それらはどのようにつくりだされ、機能するのかを、具体的な研究事例の分析を通して明らかにする。
- (2) その上で、それらがどのように乗りこえられうるのか、研究者の連携に必要な要件を考察するとともに、学際研究プロジェクトの比較研究をするための研究手法を提示する。

研究シンポジウムにおける議論の様子 Free discussion in a research symposium

Reflecting the emergences of multifaceted problems worldwide, such as human security, environment, natural disaster and STS (science, technology and society), there are currently a lot of collaborative research projects which aim for "inter-disciplinarity" or "collaboration" between the natural and social sciences. Most of their actual collaborations, however, have not yet been academically examined. This research therefore tries to examine how researchers from different backgrounds confront, struggle and overcome the difficulties during the process of interdisciplinary research projects which work between both the natural and social sciences.

As a case study, we chose the experience of the Global-COE program "In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa" conducted during 2007-2012. This project is regarded as a unique collaborative research project which included a wide range of natural and social sciences such as history, anthropology, economics, agronomy, geography, political science, ecology and engineering.

All the members in this research actively engaged in the previous project, and will allow us to share the experiences. Through detailed project documentation and interviews, we will analyze what happened during the formation of "integrated knowledge" in the project. Here we assume the dynamic process that 1) sociopolitical and scientific framing, and 2) configurations of different backgrounds and "cultures" of the participants and 3) organization structures and participants' commitment of the project affected the overall process of knowledge integration.

This is a meta study attempt which seeks for possibilities and conditions of inter-disciplinary research collaborations, as well as explores methodologies to compare different interdisciplinary research projects. Finally, we expect the following results from this research.

- An understanding of the possibilities and constraints of collaborative research between natural and social sciences as well as ways to evaluate their production and function.
- An understanding of the conditions for research collaborations and the methods for comparing different interdisciplinary research projects.



オンサイト・ディスカッションの場としての現地調査(インドネシア・スマトラ島) Field trip as an arena for on-site discussions (Sumatra, Indonesia)



東南アジアにおける社会・生態レジリエンスに関する地域間比較研究

Comparative Studies on Social-Ecological Resilience in Southeast Asia

内藤大輔(総合地球環境学研究所・研究高度化支援センター),甲山 治(京都大学・東南アジア研究所),阿部健一(総合地球環境学研究所・研究高度化支援センター),柳澤雅之(京都大学・地域研究統合情報センター),久米 崇(愛媛大学・農学部),富田晋介(フリーランス研究者),生方史数(岡山大学・大学院環境生命科学研究科),嶋村鉄也(愛媛大学・農学部),石本雄大(総合地球環境学研究所・研究部)

Naito Daisuke (Research Institute for Humanity and Nature, Center for Research Promotion), Kozan Osamu (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Abe Kenichi (Research Institute for Humanity and Nature, Center for Research Promotion), Yanagisawa Masayuki (Kyoto University, Center for Integrated Area Studies), Kume Takashi (Ehime University, Faculty of Agriculture), Tomita Shinsuke (Freelance researcher), Ubukata Fumikazu (Okayama University, Grad. Sch. of Environmental and Life Science), Shimamura Tetsuya (Ehime University, Faculty of Agriculture), Ishimoto Yuudai (Research Institute for Humanity and Nature, Research Department)

研究概要 Outline of Research

東南アジア地域では、地域住民が多様な生業形態を持っていることが多く、 農外就業もさかんにおこなわれている。そのような社会環境のなかで、社会・生態レジリエンスをいかに評価すればいいのだろうか。これまでのレジリエンス研究は概念的な研究が先行しており、東南アジアでの実証的な研究が十分行われているとはいいがたい。柔軟な生業活動、重層的なセイフティーガードを持つ地域社会において、自然災害や環境変動、社会変容などのショックに対して、地域住民がどのような対処行動を行うのか、社会・生態レジリエンスを実証的に検証するための評価、測定、分析手法を検討したい。 In Southeast Asia, local people tend to diversify their subsistence activities and engage in agricultural wage work. How should we evaluate socio-ecological resilience in such a social and cultural environment? Most previous resilience studies have only been theory-based, and empirical studies are very limited. The group aims to identify the methods to evaluate, measure, and analyze how local people respond to shocks such as natural disasters, environmental changes and social transformation, especially upon communities where they have flexibility in subsistence activities and layered safety guards.

本共同研究では、これまで東南アジアをフィールドに研究してきた研究者を中心に、また自然科学分野の研究者との学際的な研究により、蓄積されてきたデータを元に地域間比較を行うことで、東南アジアにおける実証的なレジリエンス研究を検討する機会としたい。

東南アジアにおいて、これまであまり実証的な研究がなされてこなかったレジリエンス研究について、長期でフィールドワークを行ってきた研究者が蓄積してきた研究データを元に分析し、地域間比較を行い、統合的な理解につなげたい。初年度は7月頃に第1回研究会を開催し、「自然災害に対するレジリエンス」について研究発表を行う。そして東南アジア研究の特集号出版に向けた議論を行う。続いて11月に第2回研究会を開催し、「社会変容に対するレジリエンス」についての研究発表を行い、議論を行う。そのなかで論文原稿を準備し、メンバー間で読みあい、精査する。なお各回には国内外でレジリエンス研究に携わる講師を1人ずつ招聘し、話題提供をしてもらい、議論を深めたい。

これまで概念的な研究の多かったレジリエンス議論に対し、地域研究をベースとした実証的な調査による研究手法の先行事例を提供する。また東南アジアだけでなく、アフリカとの地域間比較を行うことで、社会・生態レジリエンスの理解を深め、汎用性のある研究方法を提供したい。研究成果は和文学術誌『東南アジア研究』の特集号として東南アジアにおける社会・生態レジリエンス研究に関するテーマを取り上げたい。

The research group aims to carry out empirical studies on resilience in Southeast Asia. The group consists of researchers who have long conducted fieldwork in Southeast Asia and will conduct comparative studies on resilience based on accumulated data through interdisciplinary studies with other natural science researchers.

In the first year, the first seminar on "Resilience on Natural Disaster" will be held in July 2013 and the second seminar on "Social Resilience" will be held in November. During this seminar, a paper draft will be prepared and reviewed. For each seminar, a guest speaker from in and out of the country will be invited to share ideas and further discussion.

Resilience studies have long been conceptual, but the group aims to illustrate examples of empirical research methods based on area studies. Area of interest will not only be on Southeast Asia but also on comparative studies with Africa to further our understanding of socio-ecological resilience and provide universal research methods. Our research results will be published in the special volume *Tonan Ajia Kenkyu*.



インドネシア、グヌン・キドゥルにおける深井戸 A deep-drilled well in Gunung Kidul, Indonesia



グヌン・キドゥルのチーク林 Teak planted in Gunung Kidul, Indonesia



萌芽型/JCAS

インドネシア・パプア州における神経難病の時代的な環境変化に伴う変遷

Secular Ecological Transition in Neurodegenerative Diseases in Papua in Indonesia

奥宮清人 (総合地球環境学研究所・研究部),**葛原茂樹** (鈴鹿医療科学大学・保健衛生学部医療福祉学科),**小久保康昌** (三重大学・大学院地域イノベーション学研究科), Eva Garcia del Saz(高知大学・教育研究部),**松林公蔵**(京都大学・東南アジア研究所),藤澤道子(京都大学・東南アジア研究所)

Okumiya Kiyohito (Research Institute for Humanity and Nature, Research Department), Kuzuhara Shigeki (Suzuka University of Medical Science, Faculty of Health Science), Kokubo Yasumasa (Mie University, Graduate School of Regional Innovation Studies), Eva Garcia del Saz (Kochi University, Research and Education Faculty), Matsubayashi Kozo (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies), Fujisawa Michiko (Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies)

研究概要 Outline of Research

インドネシア・パプア州 (西ニューギニア) は、グアム島や日本の紀伊半島とならんで、筋萎縮性側索硬化症 (ALS) とパーキンソン症候群が多発する世界3大地域のひとつである。同地域の現地研究者と協力し、神経難病の病型や予後の縦断的な変化と、環境変化との関連を調査することにより、病因に寄与する環境要因を研究する。

Few follow-up studies have been made on the high incidence of amyotrophic lateral sclerosis (ALS) and parkinsonism in Papua, Indonesia since the survey was reported in 1991. To clarify the clinical epidemiology of ALS and parkinsonism in Papua, we have examined the recent prevalence and characteristics of these diseases in the area. Compared with the previous report, the recent prevalence of pure ALS in the south costal area in Papua might be lower, but many cases of overlap of ALS and Parkinsonism were still recognized recently. Although indigenous people previously had a traditional lifestyle such as hunting, gathering, fishing and eating Sago palm, a recent increase in rubber planters has resulted in a lifestyle change with the spread of the market economy in Papua. Continuous follow-up surveys will be carried out focusing on clinical epidemiology and etiology of the neuro-degenerative diseases in association with ecological and environmental changes in Papua.

インドネシア、パプア州では、通常の100倍以上の神経難病の多発が報告されたが(1970年代)、その後、十分な調査がなされていなかった。一方、グアムでは、生活様式の近代化とともに、1980年代にALSの急激な減少とパーキンソン症候群の割合の増加が報告された。我々の最近のパプアの調査により神経難病の多発を確認した。まさに今、生活の近代化が浸透してきており、時代的な環境変化に伴う神経難病の病型の変遷を調査し、病因に寄与する環境要因を明らかにすることが目的である。

土壌や飲料水中のカルシウムやマグネシウムの欠乏や、そてつの実の神経毒が病因に関与するという仮説があるが、まだ確証はない。パプア州の症例は、紀伊やグアムに本来多発していた ALS /パーキンソン/認知症複合と酷似しており、同一疾患である可能性が高い。パプアは、現在でも神経難病が多発している点が世界の多発地域の中でも特異的であり、縦断的に環境変化と病型の変遷を調査することにより、病因に迫る意義は大きい。

横断的、縦断的調査により、神経難病の頻度と推移を明らかにする。同一患者および家族内で、ALS、パーキンソン症候群、認知症の合併を調べ、ライフスタイルや生態学的な要因と、疾患や老化との関連を明らかにする。高齢者包括的機能検査、栄養調査、飲料水や身体(毛髪等)の金属分析の結果と、環境変化にともなう病態の変遷や予後を縦断的に比較することにより、病因に迫ることが期待される。

Along with Guam and Kii in Japan, Papua (Indonesia) is one of the foci with the highest incidence of ALS and parkinsonism in the world. Disappearance of the high incidence of ALS and parkinsonism in Guam and Kii has been reported, as was a decline of ALS in Papua. However, there have been few follow-up surveys in Papua since 1991. We carried out a survey for neurodegenerative diseases from 2001 to 2012 and clarified the high prevalence of ALS and parkinsonism in Papua.

The purpose of this research is to clarify the association of clinical epidemiology with ecological and environmental changes in Papua.

It is significant that there are still many cases showing pure ALS and an overlap of ALS, parkinsonism and cognitive impairment in Papua, different from the recent situation in Guam and Kii. The changing patterns of decrease of ALS and increase of parkinsonism in Papua might be caused by a change of environmental and socioeconomic factors as well as aging in Guam and Kii.

It is expected that etiology or risk factors of the neuro-degenerative diseases will be disclosed in association with environmental factors.



ニューギニアに多発する神経難病に対する青空健診

An Open-Air Medical Examination on sites for Neurodegenerative Diseases in New Guinea



ニューギニア河畔の夕暮れ Sunset on Riverside in New Guinea



仏領期メコンデルタにおける大土地所有制の研究

公募出版

A Study on the Large Land-Ownership in the Mekong Delta during the French Colonial Period

高田洋子(敬愛大学・国際学部)

Takada Youko (Keiai University, Faculty of International Studies)

■刊行物の内容 Contents of Publication

本研究は、植民地支配下のメコンデルタ(現ベトナム領)における輸出米増産と大土地所有制の史的過程を論じている。植民地文書等の一次資料と臨地調査に基づき、(1) コメ輸出と貿易・国際関係、(2) 国有地払い下げ制度(コンセッション)と水田の拡大過程、(3) 農村の構造と変容、(4) 開発のなかの土地集積及びベトナム人、クメール人、華人などの民族間関係について、詳細かつ多面的に考察したモノグラフである。フランス帝国主義下のメコンデルタ西部社会の変動とその歴史的特質を中心に明らかにするものである。

- (1) 本研究はベトナム及びフランスの公文書館等の一次資料の分析に基づいて、メコンデルタ大土地所有制に関する多くの新しい知見を含む。例えば、大土地所有制成立の国際的背景となったコメ輸出市場の変化について、その詳細な記述は類を見ない。本書の刊行は、近代ベトナム社会経済史研究及びインドシナにおけるフランス植民地主義研究に大きく貢献すると思われる。
- (2) 本研究の特徴は、社会経済史研究を基盤に、国際関係論的な 視点、臨地調査による人文地理学的な景観観察及び聞き取り 調査も加えた学際的手法を用いた点にある。農村調査と社会 科学的分析を結合し、多面的かつ具体的にメコンデルタ大土 地所有制の実像に接近している。地域研究のユニークな方法 として示唆するものが多い。
- (3) 大土地所有制の成立と構造を、水田開発を推進した植民地政府の土地払い下げ認可令(土地譲渡)の収集と分析から明らかにした点は顕著な研究成果である。フランス植民地支配がメコンデルタ多民族社会にベトナム人の民族的優位をもたらしたとする指摘も重要な論点といえる。
- (4) 植民地期のメコンデルタ大土地所有制の成立と崩壊をめぐる問題は、第二次世界大戦後のインドシナ国際紛争の重要な背景であり、その解明は現代のインドシナ社会および諸民族間関係を理解するために有益である。今後、経済交流の進展が見込まれるメコン川流域諸社会に関心を持つさまざまな人びとがこの地域の歴史的課題を理解する一助となるだろう。

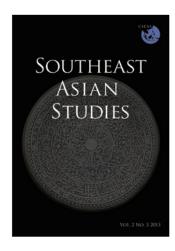
フランス植民地時代に開削されたメコンデルタのチョガオ運河を行く The author on the Cho Gao Canal dug in 1877-8 during the French colonial period (the east Mekong delta)

This work is a monograph, extensively discussing the large-scale land holdings for the export rice production in the Mekong Delta, now in Vietnam, during the French colonial period. Based on a survey of historical materials in the archives in Aix-en-Provence and Ho Chi Minh City, and field research in the Mekong Delta, the author discusses (1) the important role of the rice exports from Saigon within Indochinese foreign trade, (2) land concessions and the expansion of rice-monoculture, (3) social change and class relations in villages, (4) land accumulation and ethnic relations among Viet, Khmer and Hoa. This work aims to make academic contributions by locating historical change in the western Mekong Delta during the period of French imperial rule.

- (1) This study will conduct a survey of the primary sources including materials in the French National Archives in Aix en Provence (CAOM), the National Archives in Ho Chi Minh City (Trung Tam Luu Tru Quoc Gia II), making many findings about large-scale land holdings in the Mekong Delta. The analysis of the rice-export market is much more extensive than any other previous studies. It succeeded in discovering the international surroundings of the spread of largescale land holdings. The publication will be a great contribution to the study of modern Vietnamese socio-economic history and French colonialism.
- (2) The uniqueness of the study exists in a synthesis of multiple approaches, that is, international studies, a landscape study from the view point of human geography, and interviews of elder people living in villages on the basis of socio-economic historical study. A combination of field research in the villages and the multiple approaches of social science will clarify the real entities of large landownership in the Mekong Delta. This method is innovative and suggestive of the methodology of area studies.
- (3) One special contribution of this study will be an analysis of the origin and basic structure of large landownership by looking at government documents approving licenses to obtain public lands. Colonial governments sought to develop rice-production in the Mekong Delta through concessions, leading to the dominance of the Viet people over the Khmer. This analytical approach to ethnicity is also a strong feature of this work.
- (4) The establishment and collapse of large landownership in the Mekong Delta formed an important background to international conflict in postwar Indochina. This study will be a significant contribution in clarifying the causes and effects of the conflict. It will be of great help to scholars and persons who are interested in understanding the historical issues of the region where international cooperation can promote economic development.



今も各地に残る古めかしい洋館(バクリュウの旧大地主通り) An old landlord's house in Bac Lieu (the west Mekong delta)



「東南アジア史における交易網と中継港の役割 "Trading Networks and the Role of the Entrepot in Southeast Asian History"」(平成 22-23 年度 IPCR 採択プロジェクト 研究代表者:川村朋貴)および「東南アジア交易史における『長期の 19 世紀』 "The Long Nineteenth Century" in Southeast Asian Trade History"」(平成 24-25 年度 IPCR 採択プロジェクト 研究代表者:杉原 薫)の研究成果の第一弾として、下記の Special Focus が Southeast Asian Studies Vol. 2 No. 3(2013 年 12 月刊行)に掲載されました。

Special Focus

Reconstructing Intra-Southeast Asian Trade, c.1780–1870: Evidence of Regional Integration under the Regime of Colonial Free Trade Guest Editor: Sugihara Kaoru

Sugihara Kaoru (National Graduate Institute for Policy Studies) and Kawamura Tomotaka (Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo) "Introduction"

Kobayashi Atsushi (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University) "The Role of Singapore in the Growth of Intra-Southeast Asian Trade, c.1820s–1852"

Shimada Ryuto (Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo) "The Long-term Pattern of Maritime Trade in Java from the Late Eighteenth Century to the Mid-Nineteenth Century"

Ota Atsushi (Graduate School of Letters, Hiroshima University)
"Tropical Products Out, British Cotton In: Trade in the Dutch Outer Islands Ports, 1846–69"

「2013年 タイ国研究基金最優秀研究賞を獲得」

IPCR-CSEAS の共同研究「東西文化回廊研究――ミャンマーからタイ、カンボジアを中心に――」(平成 24-25 年度、代表者:柴山守・京都大学・地域研究統合情報センター)の一部をなしている、共同研究者の Dr. Surat Lertlum (Chulachom Khrao Royal Military Academy・コンピューター学科) がタイ国研究基金 (TRF) の助成を得て進めた "Living Ancient Road from Angkor to Phimai" プロジェクト(2008-2012)が、タイ国研究基金研究開発部門で、最優秀の研究であると評価されました。

"Best Thai Research Fund (TRF) Research Award" in 2013

The Thai Research Fund sponsored the most excellent research is awarded to "The Research Project on the Relationship of the Ancient Through Present Culture for the Development of Cultural and Civilization Database for GMS and Malay Peninsula Regions" headed by Dr. Surat Lertlum, Chulachomklao Royal Militaly Academy, Thailand. The project is part of IPCR-CSEAS research "Study on East-West Cultural Corridor—From Myanmar to Thailand and Cambodia" (2012-2013:Leader: Prof. Shibayama Mamoru, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University).

受賞



調査地における Surat Lertlum 博士 Dr. Surat Lertlum, in his research site





共同利用·共同研究拠点

京都大学東南アジア研究所 CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES KYOTO UNIVERSITY



46 Shimoadachi-cho Yoshida, Sakyoku, Kyoto, Japan 606-8501 TEL: 075-753-7302 FAX: 075-753-7350 http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/